

---

# 世界の異端者

水月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の異端者

### 【Nコード】

N3956N

### 【作者名】

水月

### 【あらすじ】

一人の少年が死した後に、かなりマイペースな男 シンと出会い転生する事が決まった！本の意味はほぼ無視！まあ、本人は人並みには異世界に対する興味があつた。彼が向かう世界とは！？

『世界の異端者』 始まります！更新は不定期ですが、できる限り、早く更新させて頂きます！

駄作なので見られる方は注意してください。タイトル変えました。更新停滞中。更新予定なし。申し訳ございません。

## プロローグ（前書き）

どうも、水月です。

それでは、魔法先生ネギま！世界の異端者始まります！

## プロローグ

「……ここは……」

俺が目を覚ますと、そこはどこかの一室だった。

……は？　なぜ？

「お？　漸く目を覚ましたか、少年」

……ん？

声が聞こえてきた方に目を向けるとそこには、机に腰を掛けた体勢でこちらを見ていた男（？）がいた。いや、だって、髪を膝辺りまで伸ばしてるし、顔も中性的だし。……あそこまでいくと女にか見えない。

「いや、正真正銘俺は男だから。間違えるなよ、少年。あ、俺の事は気軽にシンと呼んでくれ」

「……勝手に心を読むな」

「いや、読んでないよ。表情から読み取っただけ。心を読む何で人としてどうかと思うしね。プライバシーの問題とかもあるだろうし。それで、少年。君はこれからどうする？」

は？ どういう事だ？

俺は目の前の男 シンの言っている意味が分からずに首を傾げた。

「……まさか……自分の置かれている立場が分かってない、とか？」

「……………そうだな」

俺が答えるとシンが納得したように頷いた。

「なるほどね。じゃあ、結論から言うけど……君、死んだよ？」

……………は？

「だから、君は死んだって。死因は俺には分からないけど、ここにいるという事は確実に死んだって事だよ？」

どういう事だ？ まさか、天国とか？

「あ、そうそう。ここはとある世界であって、君が想像してそうな天国とか地獄とか、ともかく死後の世界ではないよ」

……本当に心を読んでないんだろうな、この男。

「それで……少年、君はどうする？　ここで出会ったのはなにかの縁だろうし、特別に肉体を与えてあげても良いよ？」

「……は？」

シンの言葉で俺は固まった。

……肉体を与えてあげても良い？……気軽すぎないか？

「序でに何か能力がほしいなら付けてあげるよ。……そうだね、妥当な所で“不老不死”に“万物創造”とか、“時間”・“空間”系統の能力かな？　“直死の魔眼”とか“言霊”も良いかもね」

……序での割にはかなり強力な能力だな。俺に何をさせたいんだ？

「……そうそう、少年。前世での記憶を持ったまま転生する？　それとも前世での記憶を封印した状態で普通の転生をする？」

「……転生する事は決まっているのか？」

「それはもちろん。まず普通はこんな所に来ないで、転生の環に組み込まれて前世の記憶を封印して転生させるんだけどね。それで、君はどちらを選ぶ？　前者？　後者？」

「……前者で」

「分かったよ。記憶有りでの転生だね。……そうだ、少年、君はアニメや漫画、ゲームそれに小説と言った物に興味はあるかい？」

「……まあ、人並みには」

「それなら、異世界転生と言った形にしよう。それで能力はどんなのが良い？ 先ほど俺が言った物は当然与えるとして他には何が良い？ 希望があるなら聞くけど？」

「……かなり強引に話を進められているような気がするのは俺の気のせいなのか？ まあ、いいか。…それよりも能力か、そうだな。」

「……なら、型月の魔法と魔術。後はテイルズシリーズの術を頼む」

「ふむ？ 意外と欲がないね。それなら、簡単にできるよ。でも本当にいいのかい？」

「……ああ」

「ここは素直に頷いておいた方が良さだろう。これ以上何かを託されたら面倒だ。」

「じゃあ、まずは能力付加かな」

そう言っ、シンは俺に手を翳した。すると俺の体は一瞬だけ光って、直ぐに元通りになった。

……これで終わりなのか？随分と簡単だな。

「じゃあ、君を送るよ。とその前に君の名前は？」

「え？」

俺の名前？あれ、何だったっけ。忘れた。

「ふむ。その様子だとやはり覚えていないみたいだね。流石に名前に関しては干渉できないから自分で考えてくれよ？」

……名前か……そうだな。よし！

「その顔は決まったようだね」

「ああ、俺は『レイ＝A＝デュミナス』、そう名乗らせて貰う」

「良い名だね。あ、それとこいつを君に預けておこう」

シンは言いながら俺の前に小型の龍のようなものを置いた。



「……………何ですかそれは？」

「俺のペット。最近ぐうたらしているから君に連れて行って貰おうかと思つて。大丈夫、君の邪魔にはならないよ。これでも神龍って呼ばれる存在だし……………むしろ、こき使つてやつて」

「……………分かつた」

最終的に押しつけられるのであれば今の内に抵抗せずに受け取つておいた方が良さだろう。

「それでは異世界転移をするよ」

「転移？　転生じゃないのか？」

「いや、また零歳からなんて嫌だろうな、と俺が配慮してあげた結果だつただけど……………止める？」

「いえ、異世界転移をお願いします！」

つい丁寧語を使つてしまったが、確かに零歳からなんて嫌だ。寒気がする！

「じゃあ、はい」

シンは俺の後方を指した。それにつられて俺も後方を見てみるとそこには立派な扉があった。……まさかここに？  
そう思っただけでシンの方を振り返ってみるとサムズアップした状態で俺を歓迎してくれた。そうか、入れば良いんだな。  
俺は先ほどシンに預けられた神龍を頭に置いて扉の前に立ち、後ろに振り返った。

「シン、最後に一つだけ良いか？」

「ん？ どうした、レイ？ まだ何かあるのかい？」

「いや、お前は何か俺にここまでしてくれたんだ？」

「ああ、それはね。……面白そうだったからだよ！」

清々しいまでの笑顔でシンがそう言った。……そうか。特に理由はなかったんだな。

俺は溜息を一つ吐き、扉に手を掛けた。

「じゃあな、シン。いろいろありがとう」

「気にしなくて良いよ。俺が好きでやっただけなんだし」

「そうか。……またな、シン！」

俺は最後の言葉を吐いて扉を一気に開けた。……そして俺は扉に入った。

「ふふ、面白い奴だったな。……彼はどんな物語を紡いでくれるのかな？まあ、基本俺は見守るだけだね」

「そんな事よりも早く仕事をなさってください、シン兄様。貴方の仕事は山積みなんですから」

いつの間にか、一人の女性が俺の執務室に来ていた。まあ、誰かは分かっているけど。

「分かっているよ、クレア。そういえば、創造主は？」

「また、放浪されています。だから兄様にこれほどの書類が届いているんですよ」

「まあ、創造主は俺達の親でもあるけれど、見た目通りの面もあるしね。こればかりは仕方がないかな」

まったく、創造主は。あなたが居なければ、厄介事は総て俺の所に来るんだから、放浪癖は直してほしいかな。

さて、本当に彼はどの様な物語を紡いでくれるのかな。願わくは、何時の日か、俺達と同等の存在になる事を祈っているよ、レイ」A  
「デユミナス君。」

## プロローグ（後書き）

書き始めてしまいました。

## オリキャラ設定

名前                    レイ<sup>アタナシア</sup>II AII デュミナス

年齢                    9歳（精神年齢は18歳）

身長                    140?程度

体重                    不明

性別                    男

属性                    中立・中庸

渾名                    『魔神』 『天災』 『無限の武器庫』 『死の選定者』 など

## 主人公について

外見は転移直後、九歳ほどになっている。さらに不老不死で肉体年齢の操作ができてどんな年齢にも成れる。

顔はまだ十歳なので格好良いよりも可愛いが目立つ。蒼髪蒼眼。髪は腰より少し高い位置まで伸ばしている。戦闘時は纏めたりする。偶に他人に髪をいじられることがある。

性格は基本、身内や親友に優しく、他人には厳しい。本人曰く、「家族さえ守ればそれで良い」。よって、家族に徒なす者が有れば制裁が降る。ただ、家族に対して過保護すぎる面があるので、呆れられることも。尊敬できる人には敬語を使う事がある。

本人の願いで『型月』と『テイルズシリーズ』の魔法・魔術などを使う事が出来る。

## ステータス

筋力 C + 魔力 E X

耐久 D + + 幸運 E X

敏捷 B + + 宝具 ?

## シンとの接触で開花した能力

透化：B +

明鏡止水。精神面への干渉を無効化する精神防御。武芸者の無想の域としての気配遮断を行うことができる。

黄金律：E X

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。大富豪でもやっていける。一生金に困らない。

千里眼：A +

視力に良さ。遠方の標的の補足、動体視力の向上。さらに透視・未来視さえ可能。

カリスマ：E X

大軍団を指揮・統率する才能。ここまでくると人望ではなく魔力、呪いの類である。

精霊の加護：EX

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。さらに、精霊に祝福されているので動物に好かれ、精霊魔法などは直ぐに身につけられる（正式に精霊と契約するとさらに効果が上がる）。

シンから授かった能力

言霊：C

言葉に宿る力によって様々な現象を起こす。今のレイはこの能力を使って相手の行動を制限したりする事が出来る。

万物創造：D+

あらゆるものを創造する事ができるが、今のレイでは宝具創造が限界。（しかも、かなり短い時間で存在が保てなくなる）

時間・空間：C

時間や空間に干渉できる。今のレイでは時間を早めたり、遅めたりするのが限界。空間に関しては場所を繋ぐぐらいしかできない。

直死の魔眼：EX

“モノの死”を視覚情報として捉えることのできる眼。これが読み取って視覚する『死』とは単なる“生命活動の終了”ではなく、あらゆる意味や存在そのものが発生した瞬間に定められている概念である“いつか来る終わり”、『死期』や『存在限界』を意味し、存在の寿命そのものである。『死』は黒い線と点で現れ、強度を持たない。この『死』を切ったり突くことでそのモノの寿命を断つと、あらゆるモノを殺すことができる。



名前	イデア
年齢	???歳
身長	不明(変身するから)
体重	不明(上記に同じく)
性別	雌?
属性	中立・善
ステータス	
筋力	A+++ 魔力 EX
耐久	B++ 幸運 EX
敏捷	B+++ 宝具 ?

シンのペットだったらしい小型の神龍。何故か何時もレイの頭の上に乗っている。戦闘する時は本来の姿になって暴れ回る。人型にも成れる。現状ではレイよりも強い。とある条件を満たせば、ステータスが格段に上がる。現在のレイ以上に様々なスキルを保有している。つまり、レイのスキルは全てある。

## 第壱話（前書き）

どうも、水月です。更新しました。……………メインの方が全く進まない。どうしよう……………

まあ、そんなことはともかく『世界の異端者』第壱話よろしく願います！

## 第壱話

扉を潜った先はどこかの草原で……戦場だった。

可笑しい、なにかが可笑的い。俺、幸運Eだったのか？

俺がそんな事を考えている間も周囲から魔法の流れ弾が襲い掛かってくる。

「仕方がないか。……消す……」

俺はそう宣言して、一息ついた。

…さて、やるか。

「古より伝わりし浄化の炎よ……消えろ！ 『エンシェントノヴァ』！」

轟

これは古代から伝わる浄化の炎を攻撃対象の上空より呼び起こし、高熱と爆風で大ダメージを与える上級晶術。

しかし、それではまだ掃討できなかったのか、生き残っている奴らがいいた。

はあ、もう少し強力なのを使うか。

「…身の程を知れ……真の力というものを思い知るがいい！  
エンド・オブ・フラグメント』！」

閃

これは自身を中心に6つの球体を展開し、レーザーを雨のように連射して攻撃する秘奥義。

ま、簡単に言えば、鬼秘奥義だ。普通の奴らなら確実に殺せる。実際、生存者はいないしな。

そう思って一段落しようとした時にそれは来た。

「てめえ、何者だ！」

「ん？」

俺の名前はナギ！ 最強の魔法使いになる予定の男だぜ！  
俺は連合軍に参加していて、今戦場の真っ只中にいるぜ！

「おい、ナギ。これじゃあ、キリがないぞ！」

今声を上げたのは俺の仲間の詠春。神鳴流って奴を使っている剣士だ！

「ふふ。ナギ、どうしますか？」

次の奴はアル。こいつも俺の仲間だ。

「うるせえ！ 全員倒すだけだ！」

そう言っただけ俺は『千の雷』の詠唱し、発動した。

「キリブル・アストラペー  
千の雷！」

轟

俺の呪文で周辺の敵を殲滅した。

「へっ！ これでどうだ！」

「流石ですねえ」

「よし、これで終わりだな！」

そう言い合い、気を抜こうとした瞬間

（っ！？ なんだ！ この殺気は！）

（これは不味そうな相手がいますね）

（な、なんだ！ この気を抜けば、圧倒されてしまいかねないほどの殺気は！）

そう、いつの間にか、彼等の元まで届くほどの殺気が戦場に充満していた。

なんなんだ、これは！

俺は戦慄しながらも、これほどの殺気を放つ人物に会ってみたいと思った。

「へっ！ 往くぞ、お前等！」

その時には仲間を掛けて俺は殺氣の中心に飛んで行った。

「あ、おい！ 待て！ ナギ！！ つく、行くぞ、アル！」

「ええ！」

詠春達は途中で追いついてきた。そのまま俺達は、殺氣の中心に向かった。

暫くして見えたのは焦土と化した大地に一人だけぽんと突っ立っている少年（？）だった。何故か頭に龍のようなものを乗せているが。

まさか、あんなやつが！

俺は意を決して声を掛けた。

「てめえ、何者だ！」

「ん？」



声を掛けられたので俺は振り返ってそいつを見た。俺はそいつを見て暫し沈黙した。

いや、まさかとは思うけどナギ・スプリングフィールドか、こいつ。十代前半の赤毛でその顔はナギだよな！……まさか、この世界は『魔法先生ネギま！』か！洒落に為らん！死ぬだろ俺！……ひとまず落ち着くか……

俺は深呼吸をして落ち着く事に専念した。その甲斐あってか、何とか平常心に戻る事ができた。

「おい、聞いてんのか！」

「む？……ああ、すまない。俺が何者か、だったな。……まあ、ちょっと力のある人間だ」

「ちょっと、ですか……」

ナギの後ろに控えていた者 アルビレオ・イマだったか がこちらに届くぐらいの音量でまるで独り言のように呟いた。

態とか、アルビレオ・イマ！ 冷静になったら色々分かったから！ 確かに焦土はやりすぎだったな！……あれ、そういえば、何故に皆様は殺気を飛ばされているんだ？……もしかして、警戒されているのか？

「……貴方は私たちを殺しに来たのですか？」

……やはりそうか。でも、何故そうなる……

「いや、違うぞ。偶然、ここを通りかかったただけだ。というか…此処、何処だ？ 序でにお前等誰？」

「…此処は魔法世界のシルチス亜大陸。私たちは紅き翼アラルブラですよ」

アルビレオ・イマが答えてくれた。まあ、漫画でお前等の事は知っているけどな。……ただ、シルチス亜大陸って何処よ？まあ、此処は全てを知らぬ存ぜぬで通しておくか。

「魔法世界？ シルチス亜大陸？ 紅き翼？ ……此処は地球ではないのか？ というか、魔法！？」

「そんな事は後で良いんだよ！ そんな事より、お前…俺達の仲間になれ！」

……はあ？

「マジ？」

「本気と書いてマジだ！」

願ってもない事だけど、他の二人は良いのか？

俺が視線を巡らせると、詠春は溜息を吐いて項垂れていた。アルビレオ・イマは口元を隠して笑っている。

「…そちらの二人は？」

返事は何となく分かっているが一応聞く。

「フッフ、私は構いませんよ」

「…はあゝ。言っても聞かないだろ。好きにしろ」

詠春が苦労人に見える。いや、実際に苦労しているんだろうな。

「なら、宜しく頼む。行く当てもないしな」

「おう、宜しくな。俺はナギ・スプリングフィールド。ナギで良いぜ」

「アルビレオ・イマです。アルで構いません」

「青山詠春だ。宜しく」

ナギ達の名前を聞いて、俺も自分お名前を伝えようとしたのだが、

視線が俺ではなく俺の頭上に集中している事に気付いた。

「なあ。そいつ、竜だよな」

「いや、神龍らしい。名前は知らんが」

「って、知らないのかよ！」

ナイス、ツツコミ！ ……ではなく。

「本当に知らんぞ。俺が飼い主という訳でもないしな」

「じゃあ、そいつの事なんて呼べば良いんだ？」

……さあ？

心の中でナギの言葉に対しての返答を述べた。でも、流石にふざけている場合じゃないので、仮称でも付けてやろつかと考えようとした時

《アイデアよ。そう呼んでもらって構わないわ》

どこからか声が響いた。いや、どこからかはほぼ決まっているので俺以外の紅き翼のメンバーがそちらを 神龍の方を見た。

「お前…話せるのか？」

《正確に言えば、思念通話の類よ。この形態では人語は話せないから》

「なるほど」

アルは納得したように頷いていた。俺も一応は納得した。

「なあ、なんで今まで思念通話をしてこなかったんだ？」

《別にする必要はなかったでしょう？貴方は自力で苦境を乗り越えていたじゃない》

確かにそうだが……

「それでも、一人だと寂しい。できれば話してほしかったな」

《……そう。次からは気を付けるわ》

それは助かる。

俺はそう思い、アイデアの気配りに感謝の意を込めて頭上のアイデアを撫でた。

《…私を撫でるのは構わないけど……いい加減、名前ぐらい言えば？》

あ、そう言えばそうだったな。

俺はアイデアの言葉にそう思い当たって、ナギ達の方を向き直った。

「…遅くなったが、俺はレイⅡAⅡデユミナス。先ほども言ったが、宜しく頼む」

これが俺とナギ達、紅き翼の初めての邂逅だった。

## 第壱話（後書き）

やっと、紅き翼との邂逅。次話はここから一気の飛ばして、ラカンとの邂逅の話にしたいと思います。

次話でもよろしく願います！

## 第弐話（前書き）

何とか書き上がりました。……ただ、今回全て三人称なので読み辛いかもしれませんが、先に謝っておきます、ごめんなさい。

それでは『世界の異端者』第弐話よろしくお願いします！



## 第貳話

「レイ、貴方もバグでしたか。そうですか」

「いや、そんなことを言われても困るんだが……」

先日、彼等の『紅き翼』の仲間になったレイは今、アルにこの世界の魔法を教えて貰っている。一応、アルとゼクトが師匠。基本、重力魔法はアルに、それ以外はゼクトに教えて貰っている。

そして、今のアルの発言はレイが僅か一週間でこの世界の全属性の最上級呪文まで使えるようになり、さらに全てを無詠唱で行えるようになったからだ。レイには苦手な属性が無かったので、それもまたアルにバグなどといわれる原因になった。

「これからはオリジナル魔法でも創るか」

「……普通そんなこと考える人はいませんよ」

アルのツツコミを聞き流し、レイはオリジナル魔法について考える事にした。

しかし彼はその思考を中断せざるを得なかった。なぜなら、

「おい！ アル！ レイ！ 鍋の用意が出来たから来てくれ！」

「おや、呼ばれてしまいましたね。行きましょうか？」

「そうだな、行くか」

レイとアルは呼ばれた方向に向かった。

暫くして鍋の周りに『紅き翼』のメンバーが一員が揃った。

「こいつが旧世界の日本の鍋料理って奴かあ」

ナギが鍋を見ながら珍しそうに言った。

「じゃ、早速肉を」

「あっ！」

「ナギ、まだ肉は早いと思うが……」

「そうだぞ、ナギ！何肉を先に入れてるんだよ！」

「いいじゃねえか、うまいもんから先だよ。ホラホラ」

ナギはレイと詠春の抗議を意にも介さずに肉を鍋に入れようとする。それを見た詠春はさらに悲鳴に近い抗議を言った。

「バ、バカ！ 火の通る時間差というものがあってだな！」

「あー、うつせ！ うつせーぞ、えーしゅん！」

「はあ……」

ついにナギが鍋に肉を入れ始めたのを見てレイは溜息を吐いた。もう、既に止めても意味がないと悟ってしまったからだ。

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』……と呼び習わすそうですね」

アルの言葉を聞いたナギとゼクトが絶句し、詠春に鍋に関する権利を任せる事にした。しかし、レイは鍋將軍ではなく鍋奉行じゃなかったか、と疑問に思っていた。が、どうでも良い事なので直ぐに思考から消した。

その後しばらくしてナギがこんな呟きを漏らした。

「姫子ちゃんにも食わせてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃん？ 誰の事だ？」

レイは話題に出ている『姫子ちゃん』について一応知っているのだが、此処で聞いておかないと後ほど困る事になりそうだったから聞く事にしたのだ。

「ああ、貴方は会った事がありませんね。ナギの言う姫子ちゃんはオスティアの姫御子の事ですよ」

「そうなのか」

アルの言葉を聞いてレイは納得したように頷いた。

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「その戦だが」

アルが言った言葉に詠春が反応した。

「やはりどうにも不自然に思えてならん」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、鳥頭」

そんな談話をしながら鍋を食べている時、いきなり空から剣が振ってきてコンロを真二つにし、鍋が宙を舞った。中身は肉限定であるがナギ、アル、ゼクト、レイの四人に回収されていた。唯一反応できなかった詠春は不運にも鍋を被ってしまったがそれに気付く者はまだいない。

そして、剣が飛んできた崖の方から彼等に声が掛かった。

「食事中失礼〜〜ツ！ 俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！ いったよ、やろうぜツ！」

襲撃者 ジャック・ラカンは態々自己紹介をしながら彼等にその様な事を言った。

その様子を見て、ゼクトとナギは先ほど回収した肉を食べながら声を上げた。

「何じゃ？ あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな。えいしゅ……むお！？」

今更ながら詠春の状態に気付いたナギは驚いた。しかも、

「フ……フフフフ……」

詠春は怪しい笑みを浮かべている。まあ、偶然とはいえ、鍋を被ってしまったのだから当然の反応なのかもしれないが。

「フ……………食べ物で粗末にする者は……………」

「どーしたー来ねーのかぁー！。来ねーならこっちから……………」

その瞬間、続きの言葉を告げ様としているラカンに向かって詠春が動いた。

「……………いッ……………」

斬！

ラカンが言葉を言い終えるよりも先に詠春は彼の持っている剣を切り裂いた。

「おほ」

「斬る」

ギギンッ！ バカッ！

詠春の剣戟のよって崖の一部が切り裂かれた。

その剣戟をラカンが凌いでいるのを見て、ナギは意外そうに言った。

「お？ 詠春の攻撃を凌いでるぜ」

「あの大男、やりますよ。見た事があります。ちよつと前に南で話題になった、剣闘士ですよ」

「へえ」

彼等がその様な話を話していると上の方では未だに折れた剣で詠春の攻撃を凌いでいるラカンがいた。

「ちよつ、タンマタンマ。あんたマジでつええな。ちよい、待たね？」

「ふざけるなつ、やる気なら本気を出せ貴様ッ！」

未だに本気を出さないラカンに痺れを切らしたのか、詠春はその様な事を言った。

「へっ、そーすか。けど5対1だし、本気出す訳にはいかんのよね」

言いながらラカンは懷から何かを取り出し己の指の間に挟んだ。

「あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ!？」

ポイポイツ

ラカンは指に挟んでいたカプセル アドゥルテラ ADULTERA を詠春に向けて放った。次の瞬間、カプセルは半人半霊のぼろ裸の女達に変わった。

それを見て詠春は吹き出した。そんな詠春を見ながらラカンはこう言い放った。

「“情報その1”、生真面目剣士はお色気の弱い」

「くっ……卑劣な。いや、何のこれしき、心頭滅却すれば火もまた」

ゴンッ!

どこから出したのか分からないが、小柄な半人半霊の女の子が大きな狸の置物で詠春を気絶させた。



それを見届けた瞬間、ナギより先にレイが動いた。

「ホイ、一丁あがり」

ラカンはその言い終えた瞬間、何かに気付いて体を回転させながら襲撃物を避けた。その後着地し、ラカンは襲撃物を見た。

それは武器だった。剣、刀、槍などの様々な武器が数十本ほど地面に刺さっていた。

ラカンはその武器を放ったであろう人物を見た。

「お前さんがこれを？」

「まあな。俺の能力を使って“創造”した武器だ。もっとも、まだ能力を使いこなせていないからその程度しかできないがな」

「へーそうかい。んで、テメエは誰だ？ 俺の情報には無かったはずだが？」

「ああ。紅き翼には最近入ったばかりだからな。知らなくて当然だろう」

「なるほどな……ッとお！？」

ラカンはさらなる襲撃者の一撃をまたしても回転しながら避けた。今度は雷だった。当然ながらこの雷を放ったのはナギである。

今し方、乱入してきたナギは視線をレイに向けた。

「レイ！ 先に行つてんじゃねえよ！」

「おう、出たな。 “ 情報その4 ” 赤毛の魔法使いは弱点なし。 特徴、 “ 無敵 ” 」

ラカン は 急に 出てきた ナギ の 情報 を 明かした。 その 事 を 聞いて、 特徴 が 無敵 という の は 可笑 しく ない だろ う か、 など と レイ は 考えて いた。

そんなレイにナギは振り返った。

「おい、レイ！そいつは俺がやる！」

「いや、こいつとは俺がやる。 悪いがナギは遠慮してくれ」

売り言葉に買い言葉の二人はこのままでは仲間同士で険悪な雰囲気になっただろうが、それを止めたのはラカンだった。

「おいおい、何を仲間同士で言い争そつてんだ。俺は同時でも構わねえぜ」

そう言ったラカンに先に言葉を返したのはレイだった。

「いや、それは無理だな……ナギ、退いてくれないか？」

「いやだね」

予想していたのだろうがレイはナギの返答に溜息を吐いた。しかし次の瞬間、ある決意をした瞳で二人を見た。

「なら、バトルロイヤルだな。この中で勝ち残った者が勝者という事にしよう」

「はっ、いいぜ」

「俺様もそれでいいぜ」

二人の同意を得た事によってレイは構えを執った。それに習ってラカンも構えた。

そんなラカンを見てナギは次のような発言をした。

「へっ、おっさん。いいのかよ、剣なしで」

「心配すんな。俺は素手のが強<sup>つえ</sup>え」

その言葉を聞いて嬉しそうな顔をしながらナギは笑った。そして、三人は激突した。

「あやつ等もよくやるの」

「そうですね。始まってから既に数時間ほど経っていますね」

そんな事を言っているのはゼクトとアルの二人。戦闘に参加しなかった二人はずっと彼等の戦いを観戦していた。

「それにしても以外でしたね」

「ん？何がじゃ？」

「いえ。レイがあそこまで好戦的だったとは。正直……驚きました」

《そう？レイは基本自分を抑えているだけだと思っけど？》

「おや？アイデア、こちらにいたのですか？」

《ええ、気付かなかったの？》

アイデアの問いかけにアルは肩を竦めながら答えた。

「気付きましたでしたよ。…そういえば、先ほど言った事はどういう事ですか？」

《先ほど言った事？…ああ、レイが自分を抑えているって言った事？》

「はい、その事です」

《言葉通りの意味よ。レイは本来好戦的な性格よ。そうでもなければ、魔法をあれほど早くに覚えられる訳無いでしょう？》

その言葉にアルの隣で聞いていたゼクトが、確かにそうじゃのう、と頷いた。

「…時に……アル、アイデア。お主等は誰が勝つと思う？」

アルはゼクトの突然の問いかけに一瞬呆気にとられたが、直ぐに答えた。

「正直分かりません。見た所、彼等の實力は拮抗していますから……」

《まあ、今のところはその通りね》

「そうじゃの。じゃが、敢えて上げるとしたら誰にするのじゃ？」

《私は当然レイよ。彼の才能は底無しだから……この戦闘中に少しずつでも開花していくと思うわ》

「……では、私はナギを推薦します。彼もまた底無しですからね」  
「なるほどのう」

ゼクトはそこで言葉を句切って、再び静かにレイ達の戦いを観戦する事にした。それに習ってアルとイデアもまた、観戦しだした。

その後、彼等の戦いは辺りを焦土と化しつつ、十時間ほど続いたのだが決着は付かなかった。

三人とも満身創痍といった感じで膝を突いて向き合っていた。レイはナギとラカンより比較的軽傷ではあったが。

「…決着<sup>ケリ</sup>は付かなかったか」

「フ……フフ……やるじゃねえか小僧共」

「あんたこそな」

レイは決着が付かなかった事を悔やみ、ナギとラカンに讃え合っていた。

「いや、5対1で挑んでおいて、この様じゃあ……俺の完敗か」

「俺は……俺に並ぶ人間がいたってだけで満足だぜ。……レイもな」

「はは。まあ、今まで戦<sup>や</sup>り合った事はなかったからな。俺も驚いたよ」

その後、ナギは詠春に負ぶって貰い、レイは何とか自力で立つ事が出来たので自力で歩き、紅き翼の面々はそのままその場を去る事にした。

「コラ、てめえ等……ナギ・スプリングフィールド！ レイ！ リベンジすんぞ、必ず決着……つけてやる……ぜえっ」

「おお いつでも……こいや、筋肉ダルマあ。戦争やってるより、

「気が晴れらあな」

「ああ。また、戦<sup>や</sup>り合おう」

そして、俺達はその場を離れた。

後に何度目か、戦<sup>や</sup>り合った後にレイが、

「一々来るより、一緒にいた方が早くないか？」

と、ラカンに提案した所、ラカンが「それもそうだな！」と言って仲間になる事になった。その事で、詠春が頭を抱えていたが彼等は気にも止めなかった。





## 第貳話（後書き）

はい、今回このような感じになりました。読み辛いかもしれませんがそこは何卒ご容赦を……………

えゝ、誤字脱字の指摘、よろしくお願いします！

作者は誤字脱字がないようになかなり気を遣っているのですが、それでも時々あると思われますので、指摘をして貰えれば幸いです。

## 第参話（前書き）

えゝ、今回は少し短いです。区切る所が今一分からなかったの  
で此処にさせて頂きました。

それでは『世界の異端者』第参話をどうぞ！

9 / 3 内容変更。

## 第参話

ラカンが『紅き翼』に入って暫くして、彼等は様々な戦で活躍した。その中でも『グレートブリッジ奪還作戦』では後世に残りそうなくらいの活躍をした。そして、これを機に連合は帝国軍を押していくこととなった。

その際、ナギは敵兵に『連合の赤毛の悪魔』と恐れられ、味方には『千の呪文の男』と讃えられた。

他にも彼の仲間であるレイには様々な異名が付けられた。味方からは『無限の武器庫』（様々な武器を投擲していたから）、『魔神』（魔術を極めし神とまでいわれているから）などと讃えられた。敵には『死の選定者』（直死の魔眼を使うから）や『死神』（無慈悲なまでに敵を殲滅するから）、他には『天災』（誰にも止められない災害のごときと言われた事から）などと恐れられた。さらには『世界と戦っても勝てる』などと、賞賛しているのか恐れられているのか、よく分からない異名まで与えられた。

また、彼等二人にはファンクラブができた。ナギは純粹に喜んでいたがレイは別だった。彼のファンクラブ会員は女が一員メンバーの大半を占めていて、女性のファンクラブ会員はお姉様な人達ばかりでレイは非常に困っていた。彼自身、理由については見当が付いていた。恐らく自分の肉体年齢を変えずにそのままにしていたのが原因だろうと思っている。しかし、今更変える事などできず、ずるずるとその問題を引きずっていた。

他にも、アルがレイに女物の服を着せようとしている。彼は断つ

たのだがアルが、せめて猫耳だけでも！と懇願してくるのでレイは折れて、猫耳だけ付ける事にした。しかし、運悪く出かけていたナギ達が帰ってきて、彼の姿を認めた瞬間、笑い転げた。それを見てレイは感情を消した顔で剣群を“創造”して叩き潰した。……………流石に刃は潰していたが、それでも相当の痛手だったであろう。

それから『紅き翼』にガトウとタカミチという人達が加わった。レイは肉体年齢近いタカミチとは直ぐに仲良くなった。それが理由で一緒に修行したりもした。ただ、その際にガトウに『咸卦法』<sup>かんかほう</sup>を教わって直ぐに出来るようになったら頭を抱えられた。……………何かタカミチは尊敬の目で見ていたが。

彼等は今、戦痕が癒えていないグレートブリッジを見渡せる場所にいる。ナギはそんなグレートブリッジを見ながら呟いた。

「俺の故郷がある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されて、こんな大戦はもう起こらねえそうだ」

「まあ、そうだろうな。戦を始めたが最後、みんな纏めて滅ぶだろうからな」

ナギの言葉にレイが賛同した。確かに今の科学では核兵器というものが発明されていて、彼等の言う通り、戦争を始めたら全ての人類が滅ぶだろう。

「だが、こつちのこの戦はいつ終わる？ 帝都ヘラスまで攻め滅ぼすってか？」

ナギはそこで仲間の方に振り返った。

「やる気になりや、この世界にだって、旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？ 意味ねえゼッ！！ まるで……………」

「まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだと思いますか？」

この場にいる皆はアルの言葉を聞いて真剣な表情を作った。……ただ一人、ラカン馬鹿を除いては、だが。

「ある意味、その通りかも知れないぞ」

「ガトウ」

突然響いた声の主の名前をナギが代表して言った。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

そこでガトウは一端、声を切った。

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる。：

……秘密結社『コスモエンテレケイア完全なる世界』だ」

（遂に此处まで来たか）

ガトウの言葉を聞きながら、レイはこの世界の物語に自身が介入している事を改めて強く感じていた。

数日後、彼等紅き翼はガトウに呼ばれて本国の首都にいた。

「なあ、帰ってもいいか？」

「ここまで来て言うか、それ。……で、何だよガトウ。俺達をわざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

ナギ達はその言葉を聞いて、少しだけ真剣な表情に変えた。そんな状態のまま暫くすると、来たのは驚きの人物だった。

「『マクギル元老院議員！』」

レイとナギと詠春はつい声に出して驚いた。しかし、そんな彼等にマクギル元老院議員は手を振った。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ……………」

（なら来るなよ、紛らわしい）

マクギル元老院議員の言葉にレイはそんな事を思った。



そして、彼等は主賓が来るであろう方向、マクギル元老院議員が来た方向を向いた。その方向から靴音を鳴らしながら外套を被った、<sup>フード</sup>一人の女性が来た。

その女性を見ながらマクギル元老院議員は言葉を続けた。

「ウエスペルタティア王国・・・アリカ王女」

近くに来た事によって見られる王女　アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの顔を見てレイは周囲の人達にはれないようにアイデアに念話を送った。

《どう思う、アイデア？》

《それなりね。人間にしては綺麗な顔をしているわね》

《厳しいなあ》

《私の人型の方があの人間よりはよっぽど綺麗よ》

《へえ。だったら、別の機会にでも人型を見せてくれるか？》

《気が向いたらね。一応、当分はこのままの姿で通すつもりよ》

《そうか、残念だ》

レイとアイデアはもしもアリカ姫達に聞かれていたら不敬罪になり

そんな事を念話で話していた。

そして彼は周囲に視線を向けた。すると、ナギがアリカ姫の顔を見て呆然とした様子で佇んでいるのを発見した。その後方でラカンがそんなナギを見てにんまりといった擬音が付きそうな笑みを作っている。

《あれが一目惚れって奴なのか、アイデア？》

《おそらくはそうね》

《ふゝん。本当に一目惚れなんてする人いるんだなあ》

《勿論よ。貴方だって誰かに対してそうなる可能性は否めないわよ》

《んゝ。いや、俺は恋愛って言う奴に興味がない……というより、まだ分からないからな》

《……お子様ね》

《五月蠅い！》

《ふふふっ……………》

彼等はアリカ姫達が退出するまでその様な事を念話で話し合っていた。……………一応、王女の御前なので緊張感を持ってほしいものである。



## 第参話（後書き）

短い、短すぎる。いや、文字数自体は今までと何ら遜色はないのだから、うが詰め込んだ感が否めない。……………まあ、気にせずにおこう。

後、誤字脱字の指摘よろしくお願いします！

## 第肆話（前書き）

久々に三人称以外を使いました。…………でも、三人称の方が使いやすいと気付いた今日、この頃。これから三人称がかなり使われると思いますがどうかご容赦を…………

では『世界の異端者』第肆話をどうぞ！

## 第肆話

アリカ姫との邂逅から数日がたった。

「ワハハハハ、上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？ 何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ。お姫様とイチャイチャキヤイキヤイ、おしやべりしてたろーがッ！」

「してねっつの。何がイチャイチャだ、バカ」

先日のアリカ姫と会った時に、ナギが惚けた表情で王女を見ていた事について、ラカンがからかっている。

そんな二人を見て、レイとアルは溜息を吐き、詠春は呆れた表情で見守っていた。アイデアは当然のようにレイの頭上に陣取っている。

「なーに言ってんだよ。俺なんか……『気安く話しかけるな、下衆<sup>げす</sup>が』だぜ~~~~~？ ……いや、ありやイイ女だぜ。一本心の通ったな」

「頭大丈夫か、ジャック？ マゾかあんだ？ 俺あ、あんなおつかねえ女見たコトねえぞ」

「グハハハハ、そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな、てめーはよ」

「んっだ、そりゃ。意味わかんねえ、触んなっつーの。勝負すっか、てめ」

こんな事を話し合いながらも険悪な雰囲気にならない二人は仲が良いのだろう。

「しかしよ。ウェスペルタティアの王女ってことはアレか？ 例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや……姫子ちゃんのこと……なんか話にくいみたいだった」

「へえ……？」

ナギとラカンの話を聞いていたレイは話題に出た姫子ちゃん アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアについて考えていた。

（確か………それなりに長い時を生きていて、魔法世界を創造したと言われている “ 始まりの魔法使い ” の末裔だったか。………  
…不憫なものだな。生まれながらにして逃れられぬ運命<sup>さだめ</sup>を背負っているというのは）

『帝国』と『連合』。二つの巨大勢力に挟まれて、翻弄され続けてきた王国王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下。彼女は自ら調停役となり、戦争を終わらせようとしたが力及ばず、彼等『紅き翼』に助けを求めに来たらしい。

「要するに、戦争やりたいやつらがいるんだろ。まーた『あいつらか!?!』」

「『コスモエンテレケイア完全なる世界』……帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイア内部にまで、シンパがいるようだ」

「世界全てを彼等に操られているようです……やはりこれは、思った以上に根が深い……」

「『コスモエンテレケイア完全なる世界』……この謎の集団を当初の紅き翼のメンバー一員は国際マフィアや死の商人……つまり“戦争があると儲かる”奴らが作った組織だろうと踏んでいたが……その真の正体は謎のままだった。(唯一真実を知っているレイは原作の崩壊をできる限り防ぐため、彼等にその正体を教えなかった。(一応、アイデアもこの世界の事は知っている))」

そこで彼等は休暇中なので『コスモエンテレケイア完全なる世界』についての独自の内偵を開始した。……といっても、ナギやラカンはどう考えても調査に不向きだったのでレイ(アイデアは流石に目立つので隠れて貰って



いる）、詠春、アル、ゼクト、ガトウ、タカミチのメンバーで調査をすることとなった。

一方、ナギとラカンは今ならぬバカンスを楽しんでいた。特にナギはアリカ姫と一緒にいる事が多く、王女はそれなりに楽しそうにしていた。……ナギはアリカ姫によく叩かれていたが、ナギも不機嫌そうな顔をしながらも、それなりに首都での休暇を楽しんでいただろうと思われる。

そして、情報がそれなりに集まってきた時、驚愕の真実が分かった。その日、レイは丁度ガトウと一緒に情報整理をしていた。

「……………！　おい、ガトウ！　これ……………」

「な！　まさか……………そんな……………」

「よお、ガトウ、レイ。どうしたい、そんな深刻そうな顔をしてよ」

そんな時、ラカンが扉を開けて部屋に入ってきた。

「ああ、ラカン。いや、ついに奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが……」

「……ちよつとな。信じられない……いや、信じたくない情報なんだよ。情報のソースは確かだし、このファイル通りだと彼等の行動も納得できる部分があるんだが……」

「………信じたくはないが」

「もっと分かりやすく言えやお前等」

「言ってもお前には興味ない話だよ」

ガトウの言う事は最もだろう。

「まあ、これは後ほどみんなで話し合うか」

「それよりも今はこっちの方が重要だ。この大物も奴らとの関連の疑いが出てきた」

そう言ってガトウがラカンの目の前に出したのは……

「こいつは……。今の執政官<sup>コンスル</sup>じゃねえか！ メガロセンブリアのナンバー2まで奴らの手先なのか！？」

そう、メガロセンブリアの執政官が奴らの手先である可能性が出てきた。

「確証はまだ無い。外で喋るなよ？」

ガトウがそう言って話を締めくくった時、遠方で爆発が起きた。

「何だ！？」「」

「あそこは確か……………今日ナギとアリカ姫が出かけている所だな」

「大丈夫か、姫さん！」

「うむ」

「くそつ、こんな町中でデカイ魔法使いやがって。死人出てねえだろうな」

「やはり今のは……」

「ああ、奴らの手下だろ。俺とアンタ、どっちを狙ったかはしらねえけどな」

いや、この威力だとあわよくば両方ともってところ……。だが、ようやく尻尾をだしやがった。追尾魔法も掛けておいたし、逃がさねえぜ！

「よしつ、姫さんは皆のトコ帰ってる。俺は奴らを追って本拠地をぶっ壊し……」

ガッ！グンッ！

「ぐえっ」

く、首が………

「私も行くっ」

「はあ？」

危ねえのに何いつてやがる。

「ここに私を残しておく方が危険だと分からぬのか愚か者が。それに私の魔法は役に立つぞ？ 忘れたか鳥頭」

「・・・ハッ、いいぜ姫さん。ついてきな！！」

……………なるほどな。ナギとアリカ姫を狙つてのものだったのか。俺は眼を魔力で強化して現在の状況を知った。にしても、そのま  
まアリカ姫を連れて行くなよ。……………仕方がない。

《アイデア。頼んでいいか？》

《……分かったわ。でもこの形態じゃ、護るのは難しいから人型になっても良い?》

《……? 別に構わないが?》

《ありがとう。それじゃ、行ってくるわ》

何で人型になるのに俺なんかの許可を取ったんだ? ……………あ、そういえばイデアの人型まだ見た事がないな。ナギ達が俺より先に見るのか……なんか複雑だな。……………まあいい、寝るか。

翌日……………

「……で、貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか!! どんな夜遊びだそれはっ……」

「まあ……後は警察に任せただけ」

ナギがアリカ姫を連れ回した事が詠春にばれて、説教を受けている。それをレイやアル、ラカンも遠巻きながらも見守っている。

「敵の下位組織を潰しても意味はないっ！ 何の為に秘密裏に調査をしていると……大体、万が一王女殿下にお怪我でもあったらどうする気だー！」

「姫さん、ノリノリだったぜー？ 楽しかったー、とかって。……それにレイが寄越してくれたアイデアが姫さんを護ってくれてたし……あの状況で姫さんが怪我をする事なんて無かったって……」

（あっ！ こら、ナギ！）

ナギは素直にレイが送ったアイデアの事について白状してしまい、その事でレイが心の中で声を上げた。詠春の怒りの矛先がレイに向いた。

「……レイ……お前知っていたのか？」

「……まあ……一応は……」

「お前……知っていたのなら止めるよ！」

「まあ……気にするなよ、詠春。ナギの言っている通りなら別に問題はなかった訳だし」

「そう言う問題では」

「詠春さん」

そこでタカミチが室内に入ってきた。タカミチの用件はアリカ姫からナギとイデアに感謝の言葉を伝えてほしいとの事。………もつとも、タカミチはその事より、王女が笑った事に驚いていたようだが。

その事を聞かされた詠春は怒れずに沈黙してしまった。そんな詠春を見て、アルが口元に手を当てて笑っていた。

そして、ナギは懐からとある物を取り出した。

「ほら……ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

「ナイス、ナギ。グッジョブ」

「おう」

取り出した物、敵本拠地から拝借した執務官コンスルだと思われる映像が映った手紙を見て、レイがナギに対してサムズアップをしながら賞賛した。それに答えてナギもまた、同じ仕草をして返した。

それから、レイ、ガトウ、ラカン、ナギは共に証拠を持ってマクギル元老院議員の下に行くこととなった。



序でに彼等が行く前にアリカ姫は帝国第三皇女と接触しに行くことになり、すでに出発した。その際ナギはまた何かアリカ姫の気に障ることも言ったのだろう。……………両頬に手形がついていた。

## 第肆話（後書き）

…………… 最後が締まらない。どうしてこうなった。前回もこんな感じだったような……………。気にしても仕方がないか。

さあ、次はいよいよあの人物が登場！…………… といっても原作とほとんど展開は変わらないと思いますが…………… まあ、次話もよろしく願います！

また、誤字脱字の指摘、よろしく願います！

## 第伍話（前書き）

何とか書き上げました。最後の方に少しでもドラマCDの内容を入れてみました。……ただ、そうしたら、この小説の主人公の影が薄くなってしまった感が否めません。……気にせず行こうか。

はい！では『世界の異端者』第伍話をよろしくお願いします！

## 第伍話

あれから、レイ達は執務官<sup>コンスル</sup>のマクギル元老院議員の所に向かった。

「マクギル元老院議員」

ガトウがマクギル元老院議員に話しかけた。といってもこのマクギル元老院議員は偽物だが。この時点でその事に気付いているのはレイだけだった。

「ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね」

「ハ……<sup>ブラエトル</sup>法務官はまだいらっしやいませんか」

「法務官は………来られぬこととなった」

「……………ハ……………」

「……………あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここにきて……………慌てて水を差すのも、やはりどうかと思ってるね」

「ハア」

「……………」

ガトウはマクギル元老院議員の言葉に気の抜けた声を上げた。ナギは此処でマクギル元老院議員に違和感を抱いた。

そんなナギを見て、レイはそろそろ良いかと思い、ナギに念話を繋げた。

《…………ナギ…………》

《何だ……？》

《あいつは……マクギル元老院議員ではないだろう？》

《奇遇だな……俺もそう思った》

彼等は念話でその後の行動について、打ち合わせをした。

「いや……その、私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君達も無念だろうが今回は手を引いてだな……」

《…………じゃ、そう言う事で》

《ああ》

念話での打ち合わせが終わり、ナギが声を上げた。

「待ちな」

「？」

「あんだ、マクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

そう言い、ナギはマクギル元老院議員（偽）を燃やし、レイは数本の武器を創造して放った。

「ぶ！？」

「「な……」」

ラカンとガトウはレイ達の奇行を見て、驚きの声を上げた。

「ちょーーっ！？ ナギおまつ……レイまで……何やってんだよッ」

「元老院議員の頭をいきなり燃やしておまつ……レイも武器なんか放って！！」

「ばーか。よく見てみな、おっさん」

「……二人とも、目を凝らせ……」

「「何っ……」」

彼等の視線の先の炎の中から現れたのはマクギル元老院議員ではなく……少年だった。ナギとそんなに変わらないように見えるが纏っている雰囲気は全く違う。

「……よく分かったね、千の呪文の男……それに魔神……こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ」

（こいつが『地のアーウェルンクス』か。……確かに原作でジャックが言っていたように“悪の組織の幹部”といった感じだな）

レイは少年を見てその様に思った。

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガ口湾の底だよ」

「てめえっ」

「あっ、こら！ 待て！ ナギ！」

レイはナギの先行を止めようと声を掛けたが、ナギは無視して少年に突っ込んでいった。……いや、行こうとした。

ヒュッ、フォッ

「通しませんよ」

「!？」

「くらえ」

「ちっ！」

ナギは突然現れた二人組に驚き、足を止めた。そんなナギに舌打ちをしながらもレイはナギの前方に障壁を展開した。その障壁に衝突するように強力な火系魔法と水系魔法が放たれた。

「大丈夫か、ナギ！」

「ああ。それよりも強<sup>つえ</sup>えぞ、やつら！」

「ハッハ、だが生身の敵だ。政治家だ何だと、ガチ勝負できない敵に比べりゃ……………万倍!!!!戦いやすいぜ!!！」

「……………短絡的だな、ジャック」

ラカンの言葉に呆れながら溜息を漏らす、レイ。

「フ……………」



少年はそんなレイ達に不適に微笑んで通信機のようなものを取り出した。

「わ、わしだ！マクギル議員だ……うむ、反逆者だッ！……ああ。うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたッ……は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド、デュミナス、ラカン、ヴァンデンバーク、奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている、軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

「はあ、面倒な事になったな」

少年は紅き翼が帝国のスパイだという偽情報を流した事に対して、彼等はそれぞれ感想を漏らした。

「……君達は少しやりすぎだよ。悪いが退場してもらおう」

「一旦退くぞ、お前等。流石に連合の兵達と戦<sup>や</sup>り合う訳にはいかないだろ」

レイの言葉を切欠に彼等は海に飛び込み、何とか逃げる事に成功した。

「はあ、本当に面倒な事になった」

《本当にね》

「さつきまでは英雄呼ばわりが一転、犯罪者か。ヌッフ、いいねえ。人生は波瀾万丈でなつくっちゃな」

「タカミチ君達は脱出できたかな」

「……………姫さんがやべえな」

一部を除いて、追われる身になったというのにどこか呑気な奴らである。まあ、彼等らしいと言えば彼等らしいが。

翼にはめられ、連合からも帝国からも追われる身になった彼等は合流後、辺境を転戦。古代遺跡立ち並ぶ『ノクティス・ラビレントゥス夜の迷宮』へ、アリカ姫を救出に向かう。

ズズウン

「よお、来たぜ。姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

その後、彼等はアリカ姫と一緒に捕らわれていた帝国の第三皇女テオドラ・バレイシア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアを紅き翼の隠れ家がある、タルシス大陸極西部オリンボス山戻ってきた。

「なんだ、これが噂の『アラルフラ紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思

ええ……掘立小屋ではないか！」

「俺等逃亡者に何期待してたんだ、このジャリはよ」

「何だ貴様、無礼であろう！」

「へっへ〜ん。生憎、ヘラスの皇族にや、貸しはあっても借りはないんでね」

「何い？ 貴様、何者だ！」

………小学生クラスの口喧嘩である。遠くで彼等の様子を見守っている詠春も呆れ返っていた。

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国の第三皇女ですね。アリカ姫と交渉の為出向いた所を、一緒に敵組織に捕縛されていたのでしょ」

「……………何というか、不幸な皇女だな」

レイの言葉にアルは笑みを浮かべていた。

一方、別の場所ではナギがアリカ姫に話しかけていた。

「さーて、姫さん。助けてやったはいいいけどこっからは大変だぜ。連合にも帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です、皇女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で……最新の調査ではオスティアの上層部がもつとも『黒い』……という可能性さえ上がっています」

「やはりそうか……」

状況は最悪と言っていいだろう。

「我が騎士よ」

「だあら、その『我が騎士』って何だよ、姫さん。クラスで言ったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ。ならば主は最早私のものじゃ」

「なッ……」

「……かなり自己中な言葉である。ナギもアリカ姫の言葉に驚きの声を上げている。」

「帝国に連合……そして我がオスティア。世界の全てが我らの敵という訳じゃな。……じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじやろ？」

《……無敵、か。どう思う、イデア？》

少し離れた場所でアリカ姫の口上を聞いていたレイはイデアに念話を繋げた。

《まあ、この世界では最高クラスの者達ではあるわね》

《だが、お前から見ればまだまだだろう？》

《まあね。伊達に長生きしてないわ》

《ははっ。そうか、そうだな》

レイはイデアの言葉に胸中で頷いた。そして再び、ナギ達の方に意識を向けた。

「世界全てが敵　良いではないか。こちらの兵はたったの8人。だが最強の8人じゃ」

そこでアリカ姫は言葉を区切る。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士、ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「……へ。やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。……いい

ぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

ナギは跪き、アリカ姫はそんなナギの肩に剣を置いた。光を背にした誓いは一種の神聖な儀式の見えなくもない。彼等の誓いを見て、レイは思った。

（やれやれ。これから忙しくなりそうだな）

その夜、アリカ姫が休まれた後、紅き翼の者達は眠る気になれず、取り留めのない話をしていた。

「にしても、アリカ王女殿下も俺達も、本気で連合と帝国、両方を敵に回してしまったなあ」

「僕達に勝ち目はあるのでしょうか？」

「へっ……勝ち目も何も俺達紅き翼は無敵だろう？」

「っはは、流石ナギですねえ。しかし、今度の戦いばかりは我々も苦戦を強いられるでしょう」

「何せ黒幕には完全なる世界が控えておるからのう」

コスモエンテレケイア

「ということは、こうして穏やかな夜を過ごせるのも……これが最後かもしれない」

ガトウがしみじみとそんな事を呟いた。

「へっ、心気臭せえこと言ってんじゃねえよ。……けどよお、お前等。もし明日死ぬとしたら最後に何してえ？」

「はあ？何言っただ、お前」

「いやあ、俺なら何するかなあ、って思っただけ」

「確かに明日死ぬとしたら最後に何をしたいでしょう？」

タカミチの言葉を切片にその場にいる者達が唸り声を上げて考え出した。

「っというわけでえー、もしも明日死ぬとしたら最後に何をしたいですか」ー、のコーナー！」



どこからともなくラッパ音や太鼓音が響いてきた。

「って小学生か、お前は！」

「というか、コーナーって何だ、コーナーって？」

「良いんだよ、楽しけりゃ。じゃ、まずは詠春からな」

「え？」

「さーて、もし明日死ぬとしたらお前は何しますか、はい答えたー」

ナギの言葉に少し悩んで、詠春は答えた。

「ああー、んそうだな。……俺ならきつと、最後の瞬間まで剣の腕を磨いているだろうな」

「マジかよ」

「これだから生真面目剣士はよ」

「詰まらぬ男じゃのう」

詠春特有の生真面目さを持って回答に望んだのだが、不評だった。

「じゃあ、お前等は何すんだよ」

「レイお前は？」

「ん？ 俺か？ …… そうだな、頑張つて死なない未来を引き寄せ  
る為に努力するだろうな。まだまだやりたい事があるしな」

「レイらしい回答だなあ、おい」

「そうじゃのう」

「はっはー、なるほどな」

レイの回答はそれなりに好評だった。

「次、アルお前は？」

「そうですねえ。私なら                    あっはっは、秘密です」

「て、意味わかんねえ」

「というか、気味悪い」

「気になりますよねえー」

アルの言葉に皆それぞれの反応を示した。  
そして、ラカン己を指さしながらいきなり答えだした。

「因みに俺はナギとレイとだれが強<sup>つえ</sup>えか決着付けてえ」

「ジャックらしい回答だな」

「へっ、どうせ俺が勝つに決まってるだろ」

「こんガキヤー！ だったら今すぐ勝負するかぁー！」

「望む所だ！」

「ちよっ……ちよつと待ってください！」

このままでは魔法合戦が勃発したであろうナギとラカンを止めたのはタカミチだった。

「お？どうしたタカミチ？」

「そのお……あ、因みにナギさんならもし明日死ぬとしたら何をするんですか？」

「え？」

タカミチのいきなりの問いにナギはとぼけた声を上げた。

「そうじゃの、聞きたいの」

「言い出しつpeg答えるべきだな」

「ほーら。なにすんだよ、ナギ」

「……うーん……」

ナギが真剣に悩み出したのを見て、アルが口を開いた。

「んっはっはっは、言わずとも顔に書いてあります。……ズバリ、貴方は死ぬ前にアリカ王女とデートしたいんですね。あの時の約束のように」

「なっ！？ てめえ何でその事を！？ つーか何処で聞いたんだよ！」

アルの言った事は当たっていたようだ。

「はっはっは、やっぱお前、お姫様の事好きなのか？ ありゃ、いい女だからなあ」

「今更何を言っている、ジャック。そんな事、ナギが初めてアリカ姫に会った時から分かっていた事だろう？」

「因みにナギは姫と姫子ちゃんを連れて、三人で京都に行くつもりじゃったらしい」

「そーそ。ってお師匠まで！　なんで知ってるんだよ！？　つーか、レイ！　何勝手な事を言ってるやがる！」

《でも、事実でしょう？》

レイの言葉を応援するようにアイデアが念話を使い、ナギに話しかけた。

「あつはは。京都か、なるほど。それで俺に京都の見所を聞いてたのかあ……。貴様がお寺に興味を持つなど、可笑しいと思ってただ」

「ナギい。私たちの耳が節穴だと思ったら大間違いですよ」

「ッ……………<sup>ちげ</sup>違いよ。俺はただ……………」

「何だ、言い訳か？」

「つく！？　……………俺は！　姫さんも姫子ちゃんもずっと王宮しか知らなくて、窮屈な生活を送っているから、なんつーか……………たまには外の世界を見せてやりてえと思ったただけだ！」

ナギの言葉に呆気にとられた一同は声ならぬ声を上げた。

「愛、じゃのう」

「ええ。ナギさんて実は優しいんですね」

「うるっせえ！ 大人をからかうんじゃない！」

大人ではないだろう、と言うツツコミがレイからはいるがナギの耳には届かなかったようだ。

ナギはタカミチに締め上げている。

「ナギさん、ギブギブ！」

「あっはは。まあでも、誘ってあげればきっと喜ぶと思いますよー、アリカ姫」

「え？」

「本当に京都に来るなら、案内してやるぜ」

「おっ……おお」

ナギはアルと詠春の言葉に呆然としながらも返事を返した。

「でもよお、万が一お前が死んだら、お姫様悲しむだろうなあ」

「……はあ。どうだかな。……あの気の強い女の事だ。涙一つ流さねえんじゃあ」

「だれが気の強い女じゃ」

「てわあ　　！？」

アリカ姫の突然の登場にナギは奇声のようなものを上げた。

「噂をすれば」

「アリカ姫のお出ました！」

「ふう……大体主達はこの有事に、何を降らぬ話をしておるのじゃ。そんな暇があったら少しは体を休めぬか！」

正論である。

「って言うか、今の話聞いてたのか」

「聞こえたのじゃ」

「聞いてたんだろうが！」

「聞こえてしまったのだと言っている！」

「きたねえぞ！ 盗み聞き！」

「盗み聞きなどしておらぬ！」

いつものごとく始まった、ナギとアリカ姫の口論を見て、一同は溜息を零した。

「……また始まったのう」

「お二人は本当に仲良しですね」

「っは、寝るか……………」

「そうしましょう」

「そうだな。アレを見守っていたら、正直何時になるか分からないしな」

《ふふ、そうね》

こうして、彼等、紅き翼は最後であろう穏やかなの夜を過ごした。



## 第伍話（後書き）

どうだったでしょうか？今回は作者的には駄文極まれ、といった感じになってしまったのですが。……………聞くのが怖いです。

誤字脱字の指摘、よろしく願います！

## 第陸話（前書き）

何とか更新しました。内容が纏まらなくてかなり時間が掛かってしまい、申し訳ございません。

それでは『世界の異端者』第陸話をどうぞ！

## 第陸話

あの日から紅き翼は頭脳労働担当と肉体労働担当の二組に別れて  
アラルブラ  
コスモエンテレケイア完全なる世界を潰していた。肉体労働担当は基本ナギ、ジャック、  
レイ、詠春の四人だが、レイは偶に頭脳労働派に移ったりもしてい  
た。

そして、映画なら三部作、単行本なら14巻ぐらいは行くであろ  
う六ヶ月の死闘（ジャック談）の後、彼等は遂に完全なる世界の本  
コスモエンテレケイア  
拠地が、世界最古の都である王都オステイアの空中王宮最奥部『墓  
も びと きゆうてん  
守り人の宮殿』である事を突き止めた。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「まっ、俺等がやることは決まってるけどな」

「「だな！」」

レイの言葉にナギとラカンは笑って応えた。そんな彼等に近づく  
影があった。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

アリアドネーの騎士、セラスである。

「おう」

セラスの言葉に呼ばれたナギが応じて、答えた。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。それで、あの……ナギ殿……レイ殿」

「ん？」

「何だ？」

セラスにの呼びかけに疑問符を浮かべながらレイ達は振り返った。そんな彼等にセラスは恥ずかしいのか、顔を赤めらせて色紙を差し出した。

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おお？ああ、いいぜ。それくらい」

「（あれ？これってナギだけじゃなかったか？……まあ、いいか。）

……いいぞ」

「そ、尊敬していました」

渡された色紙にレイとナギはそれぞれ書き込んでいく。その様子にラカン<sup>ラカン</sup>は笑い、ゼクトと詠春は呆れた表情になった。また、アルもラカンのように声に出して笑わなかったが、笑みを浮かべていた。書き終わった色紙をセラスにそれぞれ手渡し、暫く経った後、ガトウからモニター越しに連絡が入った。

『連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。……決戦を遅らせることはできないか？』

「無理ですね。私たちでやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

モニターに映るガトウにアルと詠春が言葉を返した。

「彼らもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を……世界の鍵<sup>たそがれ</sup>『黄昏<sup>ひめみこ</sup>の姫御子』は今、彼らの手にあるのですから」

「ああ」

「“世界を無に”……か。誰もそんなことを望んでなんかいないのにな」

《そうね。……まあ、この世界が抱えている問題を考えるとそれも1つの路でしょうね》

アルの言葉に耳を傾けながらレイは自然と呟き、イデアは念話を使ってレイにだけ聞こえるように返した。イデアの言葉を聞いてそうかもな、とレイは周囲に聞こえないように呟いた。それから、ふと思いついたように表情をした。

「……ナギ、俺が一番槍をやってもいいか？」

「んあ？ 別にいいぜ、レイ」

「我々としても構いませんよ」

ナギ達の言葉に周りの者には聞こえないくらい小さな声で言質は取ったと呟き、レイは術を発動させた。

「幾星霜の時を翔ける星空の旅人よ。天理のもとに終焉をもたらせ！ 『メテオスウォーム』！！」

「天光満つる所に我はあり黄泉の門ひらく所に汝あり！出でよ、神の雷！ 『インディグネイション』！！」

レイは多重詠唱を使い、メテオスウォームとインディグネイションを発動させた。メテオスウォーム 数多の隕石を降らせる術、そしてインディグネイション 舞い上がる光が敵上空に収束し、その

後大規模な落雷を浴びせる術を使い、敵を殲滅させようとしたが、メテオスウォームはランダムに飛来するので狙っている所に降らせるのは難しい。しかし、それでもレイの術は敵の五割ほどを殲滅させる事に成功した。

「よし。行くぞ、ナギ」

「おう！ ……野郎ども、行くぜっ！」

ナギのかけ声と共にこの場にいる紅き翼のメンバーが駆け出した。

『墓守り人の宮殿』のトラップをものともせず、紅き翼のメンバーは迷宮の奥へと進んでいった。

そして、迷宮の最奥部で待ち受けていたのはあの時の白髪の少年とその仲間である者達だった。

「やあ、『千の呪文の男』、『天災』。また会ったね」

「……………その呼び方はわざとか？」

「さっきの規格外な魔法に対する嫌がらせさ、『魔神』。僕達もこの半年で君達に随分と数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

その後各自一対一。レイはナギと共に少年と戦っていた。そして彼等は勝利を収め、各自別の場所で戦っていた仲間達も続々と集合した。

現在、ナギが少年の首をつかんで持ち上げていた。

「見事……………理不尽なまでの強さだ……………」

「黄昏の姫御子は……………どこだ？ 消える前に吐け」

「フ……………フフフ……………まさか君は、いまだに僕がすべての黒幕だと思っ  
っているのかい？」

「なん……………だと？」

フェイトの言葉に困惑の表情を浮かべたナギに対し、原作を知っているレイはある事を思い出して叫んだ。

「（ッ！……………やばい！） ナギ！ そこから離れろ！」



「あ？ 何言ってんだ、れッ……！？」

バスッ！

レイの呼びかけも虚しく、ナギは迷宮の奥から敵の少年ごと貫かれた。

「「「「！？」」「」」」

「ナ……ナギッ……！！」

「誰だ！？」

「いかんッ！ レイ、合わせろ！」

「分かっている！」

「クラティステー・アイギス  
「最強防護！！」」

レイとゼクトの二人がかりでの最強クラスの防御魔法を発動した。しかしそれは紙切れのように呆気なく破られ、彼等は魔法に吞まれた。その瞬間、レイは戦闘中もずっと頭上に乗っていたアイデアを抱きかえた。

いきなり放たれた魔法により彼等は重傷を負った。特に酷いのは両腕を失ったラカンとアイデアを庇ったレイ、そしてナギを庇った詠

春だろうか。彼に庇われたナギは先の貫かれた傷を除けば、この中では比較的軽傷だった。

「ぐっ……バカな……」

「まさか……あれは……」

ラカンとアルの視線に先には彼等が負傷を負う原因の魔法を放ったであろうと思われる外套を被った魔法使いがいた。それはある者からは『造物主<sup>ライフメイカー</sup>』、またある者からは『始まりの魔法使い』と呼ばれる存在だった。

造物主は目的を達成したと見たのか、姿を消した。

「………どうやらあれが、敵の親玉のようだな」

「レ、レイ……お前……どうして………」

ラカンは先ほどまで重傷だったレイに対して当然の疑問を投げかけた。レイはそれにああ、と言って答えた。

「ちょっとな。時を弄って傷を負う前の状態にしてみた。………とはいえ、まだまだ未熟だから内面的な所はそれほど治せていないけどな」

「さ、流石……俺達の中で一番チートなだけのことはあるな……」

《まったく、無茶するわね。私なんか庇うなんて》

「“なんか”なんていうな。俺はお前の事を家族と思っているんだぞ？」

《……………そう、ありがとう。それと……………ごめんなさい》

アイデアの言葉にレイはああ全くだ、とぶっきらぼうに返し、アルの方を見た。

「……………アル。俺があいつの足を止めてくる。その間に俺以外で最も魔力が残っている、ナギの傷を治せ」

「そ、それは幾ら貴方でも無茶です！」

確かにそうかもな、と心の中でだけレイは呟いた。しかし、彼はアルを見て言った。

「だがな、アル。今動ける俺が何もなくてどうするんだよ」

「レイ……………」

「そうだぜ。アル！三十分もてば充分だ、やってくれ」

「ですがッ……………」

「ふふ、よかるう。ワシもいくぞ、ナギ、レイ。ワシが一番傷も浅い」

「お師匠……」

「ゼクト……」

「ゼクト！ たった三人では、無理です！」

「あのな、アル。俺達が此处で止めないと“世界は無に帰る”……それだけは絶対に阻止しなければならんだろうが！」

「シン……」

「ふふ、その通りじゃ」

話を終えたと同時にアルはナギの怪我を治癒し始めた。その間レイは造物主に注意を払っていたがあちらから仕掛けてくる事はなかった。余裕のつものようだ。

「そうだ、アイデア。ジャックと詠春の治療を頼んで良いか？」

《ええ、分かったわ。また人型になってもいいかしら？》

「構わない」

レイがアイデアに命令を与えている間にナギの治療も終わったよう

だ。

「よし！行くぜ！お師匠！！レイ！！」

「うむ！遅れをとるでないぞ！」

「ああ！造物主！時を与えたことを後悔するなよ！！」

彼等は造物主がいる場所に向かって駆け出した。

崩壊する墓守り人の宮殿の最深部でナギとレイは戦っていた。既にゼクトは造物主にやられてしまい、ここにはいない。

そして遂にナギの魔力を込めた拳が『造物主』の顔面に炸裂した。その次の瞬間、造物主は背後に巨大な魔法陣を展開した。

「……………クック、フフ……………フフはは、ははははははは。私を倒す

か人間、それもよからうッ……私を倒し、英雄となれ。羊達の慰めともなるッ」

「しぶてえ奴だぜ！」

ナギの言葉に全くだな、と吐き捨ててレイは造物主を睨む。

「だが、ゆめ忘れるな」

ウオガッ！

造物主は自信が展開した魔法陣に魔力を注いだ。

「すべてを満たす解はない、いずれ彼らにも絶望の帳が下りる」

ドッ！

造物主が展開した、数多の魔法陣から漆黒の魔法が放たれた。それを事前に察知していたレイは、かの有名な紅い弓兵が護りに置いて最も信頼している盾を展開した。

「『熾天覆う七つの円環』！<sup>ロー・ファイアス</sup>！」

この盾は投擲の攻撃に置いて最も効果を発揮するがそれでも簡単に碎けるようなことはない。

「ナギ！ 守りは俺に任せて、お前は攻撃に専念しろ！」

「分かった！！」

（……とは言ったものの、これを防ぎ続けるのは困難か……………）

内心を明かさないものの、ナギ自身も何となくではあるがレイの思っていることが分かる。だが、焦ることはない。ナギはレイのことを信頼しているからだ。

「貴様等も、例外ではない」

此処で魔法陣からの光線が急に途切れた。その隙を見逃すような奴らではない。

「ナギ！」

「応！」

ナギとレイは僅かな攻撃の合間を通って造物主に向かった。そしてついに肉薄することに成功した。

「さつきから、グダ、グダ、うるせえええッ！」

「貴様がこれから何をしようが関係ない！」

ナギの攻撃は腹部に通った。その間にレイは瞬時に今いる空間と造物主の背後の空間を繋げて飛び、さらに『直死の魔眼』を使い、先んじて“創造”していた二本の短剣で両腕の死の線を切り裂いた。

「…………ツ!？」

しかし、レイの『直死の魔眼』の負担が大き過ぎるために直ぐさま見るのを止めた。

「たとえ、明日、世界が滅ぶと知ろうとも!! 諦めなねえのが、人間ってモンだろうがッ！」

「貴様は俺の家族を、そして友を傷つけた! 貴様ごときが俺の世界を壊すことは許さない!」

彼等はそう言いながら造物主に連撃を入れた。そして、止めにナギは己の杖に残りの魔力をつぎ込み、膨大な魔力を宿す槍に変えた。



レイは『<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣』を創造した。

「くつくく……貴様等もいずれ私の語る『永遠』こそが、『全て』の『魂』を救い得る唯一の次善解だと知るだろう」

「人・間・を……なめんじゃ、ねえええーっ！……！」

「人・間・を……なめるなー！！！」

レイは『約束された勝利の剣』を真名解放し、ナギは己の杖を造物主に投げた。

ドッ！ボツ！！

……そしてついに彼等は造物主を滅ぼした。

その後、ゼクトを探そうとした二人に急に衝撃が襲った。

「なっ！？」

「ぐっ！？」

彼等は疑問に思ったが、衝撃が来た方角を見ると、そこには……

ゼクトがいた。

「武の英雄に未来を造ることはできぬ……貴様等には結局、何も変えられまいよ」

「……ゼクト？」

「……お師匠？」

「だが果たして……自らに問うがよい。ヒトとは身を捨ててまで救うに足るものか？」

……さらにゼクトの独白は続く。

「……人間は度し難い。英雄よ、貴様等も我が2600年の絶望を知れ。……さらばだ……」

フォッ……

話すべき事は話したとでも言うように、別れの言葉を発した瞬間、ゼクトの体が消えていった。

（そうか、あいつは……）

レイは原作を思い出し、様々な感情を浮かべた。そんなレイの近

くでは呻き声が聞こえる。

「ぬっ…………グ…………お、お師匠…………師匠…………ッ。師匠オoooooooooooo  
ーッ」

ナギの慟哭にも似た絶叫は暫くやまなかった。それを聞きながら、  
レイは自分の意識が途切れていくのを悟っていた。

（一気に魔力を使いすぎたか？…………まあ、寝るか）

気を失う寸前にその様なことを思ってレイは意識を闇に落とした。

## 第陸話（後書き）

最後がおかしな事になっている。それっぽく書いてみたけど、よく分からなかった。申し訳ございません。

あと、誤字脱字の指摘をよろしくお願いします！

## 第？話（前書き）

一週間ほど空きましたが何とか更新できました。

それでは世界の異端者、第？話をどうぞ。

## 第？話

レイが再び意識を取り戻したのはあれから半日以上（正確には1  
6時間程度）経った頃だった。

「……知らない天井？」

《……体調は大丈夫そうね》

レイが何時も通りに見えて、アイデアは若干呆れたように念話を飛ばす。

「ん？ アイデアか？ ああ、あの時倒れたのは慣れない事をしたからだろうな。……お前が此处まで運んでくれたのか？」

《ええ、そうよ》

「ありがとうな。……で、アルは何をしているんだ？」

「おや？ 見つかりましたか？」

アルビレオは扉を開いて入ってくる。

「気配でな。起きた時から気付いていた」

「なるほど。……体調の方は良さそうですね」

「見ただけで断言するなよ。まあ、確かに今回倒れたのは、短期間で過剰に魔力を放出しすぎた所為だろうが、それでも心配ぐらいしてくれ」

「ふふ、そうですか」

アルビレオがレイの言葉に笑みを浮かべた。

「そう言えば、ナギ達は元気か？」

「ええ……………ですが、ゼクトは……………」

レイはアルビレオの言葉を軽く首を振りながら、手を翳して止めた。実際彼はゼクトが消える、いやいなくなるのを見たのだから、その説明は不用だった。

そのまま、暗くなるだろうと思われた室内は唐突に破られることとなった。

「おい！ アル！ レイが起きたって本当か！？」

バァン、と音を立てて扉を開いたのはナギだった。

「よっ、ナギ。何とかなっ たな」

「ああ！ お前の御陰だ！」

正面切って賞賛の言葉を貰ったレイは多少顔を恥ずかしさで赤めらせた。

「あれ？ アルの奴、何処言っ た？」

「ん？ そう言えば、お前が入ってきた時ぐらいに気配がロストしていたような……………」

《ええ。ナギが入ってきた時に転移で何処かに行っ たわ》

「アルの野郎、逃げやがっ たな。まあ、いいか。それより、レイ！ 正装に着替えろ！ 今から受勲式があるんだってよ！」

「……………分かった。直ぐに着替えよう」

拒否権がないことを本能的に悟ったのか、大した抵抗も見せずにレイは正装に着替える事にした。……………もちろん、アイデアから見えない位置で。

その後、レイはナギ達と共に受勲式に出た。その際、アイデアが帝



国の古龍・龍樹と仲良くなっていた。さらに何故か、レイが龍樹に頭を下げられ、周囲にいた者は困惑した表情でその様子を見守っていたとか。

受勲式が終わった後、紅き翼のメンバーは宴会をしていた。始めはリーダーのナギ抜きだったが、暫く飲んでいるとアリカ姫と対話をしていたナギが現れた。

ギイツ

ワアアアアアッ

「うお」

「真打ち登場！」

「来たかナギ」

「アンタ歴史の教科書に載るぜ」

始めはナギは歓迎の勢いに驚いたが、直ぐにレイ達紅き翼がいる所へ向かった。

そして、ラカンと向き合ったと思えば、急にど突き合いを始めた。因みにラカンの腕はアイデアにより再生している。

「てめえ、胸の傷はもういいのかよ!？」

「てめえこそ両腕ねえくせに偉そうにッ」

「ガハハハハッ。腕はアイデアに治してもらったんだよ。言ってなかったか？」

「傷をド突き合うな、貴様らぁーッ!！」

アイデアに直して貰ったとは言え、ラカンの腕は普通ならば暫くはまともに使えないはずなのだが、そこはバグキャラ、ジャック・ラカン。何時も通り使用していた。

「詠春。てめーも一番怪我ひでえのによく式典とか出るぜ。ワハハ!」

「だから傷をド突くな!! 死ぬわ!!」

一応、詠春もイデアの治療を受けていたので、表面的な傷は治せているのだが、あまり衝撃を与えたりすると傷が再び開きかねない。その事を理解している詠春はラカンのド突きを止めるように言ったが、聞いて貰えなかった。

「つか、アル。てめえは何で受勲式出ねんだよっ!？」

「私、上がり症なもので……」

「嘘つけーッ」

ナギは受勲式に出なかったアルビレオを糾弾しているようだったが、しかし、アルビレオは何処吹く風と言った風に返していた。暫く談笑していたのだが、詠春のある言葉で話題が一気にすり替わった。

「まさか、あのゼクト殿が逝ってしまわれるとは……」

「な　？　あの妖怪じじい、殺しても死なねえ気がしてたんだが、まあ戦争だしよ、他にも大勢死んだ」

「いや、お師匠は……」

「ナギ」

アルビレオはナギの肩に手を置いて、ナギの言葉を遮った。己が  
方を向いてきたナギにアルビレオは指を一本立てて、黙っていてく  
ださい、とでも言うようなジェスチャーをした。

そんな二人の様子に何を思ったのか、ラカンが己のコップを持ち  
上げた。

「……死んだ奴等と、世界の平和に」

ラカンが珍しく真面目な顔でそう言いきった。  
その後、各々別れて飲んでいるとタカミチがアルビレオの近くに  
寄った。

「アルさん」

「おや？ どうしました、タカミチ君？」

「諸悪の根元を倒した翌日に停戦合意…即、記念式典なんて随分手  
際が良いですね？」

「まあ、両大国の本格的な講話実現はまだ先になりますから、まず  
は『和平成る』を全世界に対してアピールしたいのでしよう」

「……でもアルさん。式典もこんな王都から遠い離宮で行って……  
何かオカシイとは思いませんか？」

「……おい、アル。ちょっと良いか？」

此処で急にレイがアルビレオとタカミチの話に乱入してきた。アルビレオはその事を疑問に感じて、問い返すことにした。

「おや？ どうしました、レイ？」

「込み入った話だ」

レイの言葉にアルビレオはふむ、と頷いて応えた。

「分かりました。……タカミチ君、私はレイと話があるので失礼しますね」

「あ、はい」

彼等はタカミチと別れた後、アルの転移を使って、彼等は紅き翼の秘密基地の一つにお邪魔していた。

「それで、どうしました？」

「……………とりあえず、オスティアの事だが……………後どれくらいで墜ちるんだ」

「おや？　気付いていたのですか」

単刀直入なレイの言葉にアルビレオは驚いた。

「当たり前だろ。それで……………後どれくらいで墜ちる？」

「そうですね。……………後数時間ほどで本格的に墜ち始めますね」

「なら、間に合うか」

その言葉を発し、レイは踵を返した。アルビレオはそんな彼を止めようと口を開いた。

「ま、待ってください！　何をする気なのですか？」

「……………出来る範囲での人命救助だ。……………そうだ、アル。ナギには暫く紅き翼に戻らないと伝えておいてくれ。後、ナギを頼む。お

そらく騒ぐだろうしな」

振り返らずに言葉を返したレイは歩き出した。アルビレオは今度  
は止めるつもりはないのか、確認のように言葉を発した。

「……帰って来ますか？」

「当然。暫く離れるだけだ。死ぬつもりもない」

言葉を返している間もレイの歩みは止まらない。そして遂に扉に  
手が掛かった。そして、無言のまま、その場から出た。アルビレオ  
を置き去りにして。

「さて、急がなくてはな」

《ええ。急ぎましょう》

この秘密基地はオスティアからさほど離れた位置にあるという訳  
ではないので、彼は飛翔して向かった。

## 第？話（後書き）

このような感じになりました。次話で救助活動をした後は、暫く放浪する予定です。と言っても、一年ほどですが。アリカ姫の事もありますしね。

……まあ、どのような話を挟むかはまだ決まっていらないのですが。もしかしたら、再開まで飛ばす事になるかもしれません。

では、いつもの事ですが、誤字脱字などの指摘をよろしく願います。



## 第捌話（前書き）

また、一週間ほど空いてしまいましたが、何とか第捌話を書き上げました。

## 第捌話

レイがオスティアの救援に向かう時より、少しだけ時間が遡る。  
丁度、ナギがアリカ姫と別れて、酒場に来た頃、アリカ姫は一人、  
その場に佇んでいた。

アリカ姫がナギとの思い出を振り返り、涙を浮かべていた時、背  
後から声が掛かった。

「陛下！！」

声でガトウだと悟ったアリカ姫は振り向かずにした。

疲れの表情を浮かべたガトウとクルトが膝を突いた状態でアリカ  
姫を見る。

「時間です。まもなく第一段階が……」

「進捗状況は？」

ガトウの言葉を予想していたのだろう、アリカ姫は間髪を入れず  
に聞いた。

「アスナ姫、封印直後から、全艦艇全力で当たっており、現在37

%  
」

「陛下のお考え通り、式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により、混乱もこれまでの所ありませんが崩落が始まればその限りでは……」

ガトウは一度言葉を句切った。

「全市民の救出は困難を極めるかと………！！！」

「………ッ。わかった。……妾も直接指揮に当たる！！！」

「空中王都周辺に強力な魔力消失現象を確認！ 浮かんでいるのが困難になります！」

「分かっておる。対抗呪紋塗装装甲を施してある舟を向かわせる！ そうでない舟は消失現象が始まっていな地区に回せ！ 最末的

確に市民を救えるよう、最大効率で舟を回せ！！　ただし！！　捨てて良い命はない！　一人も救いもらすな。これは厳命じゃ！！」

「はっ！」

魔力消失現象により崩壊していく寸前の王都オスティアに残っている者達を救うために対抗呪紋塗装装甲を施した戦艦に乗り、次々に命令を飛ばしていくアリカ姫。

「ッ！　陛下！　王都オスティア、並びに周辺地域の小島と岩が落下し始めました！」

その報告を聞き、顔を歪めるアリカ姫。彼女は時間が圧倒的に足りない今の状況でどうすればいいか悩んでいる。そんな時

「！？　陛下！　北地域の崩壊が止まりました！　消失現状は以前進んでいます！　高度を維持しています！」

報告に序で、今度は彼女の前方の画面に紅き翼の一人、レイ「A」デユミナスの姿が映った。

「アリカ姫……いや、アリカ女王か。…北の地域は俺がどうか不時着させるから、南の地域を頼む。こちらは心配しなくて良い」

「どうやっ……………いや、助太刀感謝する」

様々な疑問が彼女の脳内に渦巻いたが、今はそれを問いつめる時ではない。今はそんな事よりも優先すべき事がある。そう思い、彼女は問うのを断念し、感謝の意を述べた。

「ああ。それでは、またな」

最後にそれだけを言い残してレイは通信を絶った。

「皆の者、聞いたな？ 北の島々はレイに任せ、妾達は南の救助を優先する。それが済み次第、北の救助を手伝う。総員、各艦艇に連絡せよ！」

「はっ！」

レイの助けもあり、民達の避難は順調に進んでいる。しかし、問題があった。

「陛下！<sup>スラム</sup>貧民島の避難作業が難航しています。このままでは！！」

「理由は！？」

「町の構造が複雑な上……不法移民が多く、全住民の把握が……」

相次ぐ報告にアリカ姫は再び顔を顰める。

「……………ッ。わかった。ここは任せる」

クルトに告げ、アリカ姫は踵を返した。そんな彼女に慌てて追いつがるクルト。

「陛下！！どこへ！？」

「<sup>スラム</sup>貧民島は、妾が直接赴き、島ごと不時着させる！妾の魔法ならこの魔力消失現象の中でも、無効化されぬ」

「いけません、女王陛下ッ！ 此处はレイさんに救援を……………」

「クルト、ただでさえレイはこの状況で約半数の民を救ってくれておる。これ以上は流石のあやつでも厳しかろう。その事はお主も分かっております？ それに妾の国の事じゃ。妾が動かずしてどうする？」

（レイには感謝してもしきれんな。あやつがおらねば壊滅的であったであろう。全てが終わった後には礼を言わねばな）

クルトに言いながら、アリカ姫はその様な事を思い浮かべていた。

「しかし」

「ゴルアアーツ。こんのバカ姫！」

「ナギ？」

「ナギ……」

突然のナギからの電波通信にクルトは言葉を止め、アリカ姫も振り返った。

「やい、アリカ。てめえっ！！ どういうこった、コレは！？」

「……見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。案ずるな。妾もいずれ、遠からぬうちに地獄へ堕ちる」

普段通りの表情でナギにそう告げるアリカ姫。

「……ッ。なんで話さなかった、この唐変木!!」

「話しても無駄であろう。戦いしか能のない主が一人で何の役に立つ」

ナギはアリカ姫の言い分に一瞬押し黙った。

「……くそッ……今からそっちに向かう。待つとけ、てめえ」

「ここにそなたの力は必要ない!! 妾を助ける暇があるなら避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する!! レイが島々を不時着させておるが避難民の頭上に落下するのまでは流石に手が回らぬだろう」

「レイが!?!」

アリカ姫の言葉にナギが驚きの声を上げる。その反応を見て、アリカ姫もまた驚いている。しかし、今はそんな事よりも優先させるべきものがある。アリカ姫は直ぐさま、次の言葉を紡いだ。

「この魔力消失現象の中ではそなたも満足には飛べまい。我らの逃亡生活中に使用したボ口舟にも対抗呪紋処理を施してある! それ



を……」

「もう乗ってるよ!!」

「ならば良い。では救助活動に全力を尽くした後、そなた達はレイを拾い、そのままここを去れ。二度と戻るな、最後の命令じゃ」

レイが紅き翼から一字離脱をした事を知らないアリカ姫はそう言っ  
た。

「何!？」

「通信終了」

アリカ姫は再び歩み始めた。しかし、クルトが呼び止めようとする。

「へ、陛下。しばしお待ちを!! アルビレオ・イマ! 聞いていますか!？ クルトです!!」

「ハイ、何です？ クルト君」

「アリカ様の仰る通りにするのが賢明かと思います。もし戻れば……あなた方はメガロメセンブリアに拘束される可能性が高い!! 今  
今は身を隠してください。時が経てば事態は好転する筈です」

クルトの必死な訴えをアルビレオは黙って聞いている。

「とにかく、コレが終わったら逃げてください！！ いいですね！？」

「わかりました。ナギのコトはお任せを」

クルトは詠春とラカンに抑えられているナギの姿を見た。

「すみません、ナギ……。これがアリカ様の望みでもあると思いますので……」

「……………」

「そなた達には世話になったな。…さらばじゃ」

「陛下も御武運を」

「お、おい。待てよ……。アリッ……………」

ブツン……

ナギが言葉を紡ぐよりも早くに通信が遮断された。その事にナギは苛立ち、二人を振り払って甲板に出た。そして、

「アリカツ……あのバカ姫………！　レイまで………！　バツ  
カヤロオオオーッ」

怒りのままに咆哮した。

崩落が終わり、浮遊岩の一つに舟を止めて休む紅き翼。崩落が終  
わったというのにその表情は浮かばない。

「犠牲者数は人口の1／5%を下回ったそうです。…これは状況を  
考えれば奇跡的な数字……」

「レイも頑張ったみたいだからな。結局捕まらなかったが………」

「そうだな。それに数が少ないからって割り切れる女じゃねえだろ、  
あの姫は。何よりマジで大変なのはこれからだろうしな………」

「……………」

ナギは他のメンバーの話に口を挟まず、一人黙って虚空を見上げていた。その瞳は何を映しているのか。彼は何を思い浮かべているのか。その真意は本人以外分らない。

ただ彼は無言のまま空を見ていた。

## 第捌話（後書き）

……え、最後の所ですが、特に深い意味はありません。ただ、  
どの様にして終わらせるか迷った末、こうなりました。……す  
みません。

## 第玖話（前書き）

……今回は作者もちょっと書いていて設定的にこれはないだろう、  
みたいな所があります。え、ある程度は見逃して頂ければ幸いです。

## 第玖話

一方、紅き翼から一時離脱したレイはと言うと、仲間に会わずに今は難民の一部、それも大半以上が孤児である、を連れて（創造したスキーズブラズニルの乗せてきた）、タルシス大陸極西部から少し離れた島に来ていた。

まず初めにレイは半径数十キロに渡る、術者が認めた者以外は術者以上の力を持った者にしか認識できない強力な認識阻害の魔法と結界を張った。次に彼は幾つかの大規模な建物を“創造”した。

ひとまず、そこに連れてきた者達を収容した。そして、付いてきた中でも比較的年長の者だけを呼び出して話をし、その会議で出た話題の内の一つの問題の解消をするためにレイはある物をひたすら“創造”する事となった。

そう、彼等の最大とも言える問題は食料の問題である。レイが引き連れてきた難民は数百から数千人ほどいる。それほどの人数を賄える食料は現在無い。従って、食糧の確保が最優先事項となったのだ。まあ、創造の力をフルに活用すれば特に問題はない。数時間から数日で食糧は確保できる。

この時ほどレイは己の創造の力に感謝をした時はない。彼はこの能力を快く与えてくれたシンに感謝をしていた。

それからレイは生活に必要なものを次々に“創造”していった。

そして、二月ほどで島の各所で幾つかの村として機能していた。その頃には活気がなかった人々も明るい表情で過ごしていた。

そんな村の様子に喜びながらもレイは暇を作っては紛争地域に行き、更に難民を救出していた。……まあ、その御陰（所為？）で村の規模がさらに膨れあがった訳だが、彼は気にしてなかった。むしろ

ろ、多くの命が救えて良かったと思っている。

さらに、アリカ王女がオスティア崩壊などを罪に着せられて逮捕された日から半年程経ったある日に、レイはイデアと共に村から少し離れた場所に来ていた。

何も言い出さないレイに疑問を持ったのか、イデアが先に切り出した。

《……それで、どうしたの？ いきなり、こんな所に来たりして……》

「いや、今までずっと考えていてな」

《……？ 何の事？》

「……どうすれば強くなれるか、だ」

そこまで言って、レイは目を細めて遠くを見た。その目は過去を映している。

「『造物主』との戦いも……おそらく、ナギがいなければ勝てなかっただろうしな。あれで己の未熟さを思い知ったよ」

《……でも、貴方はこの世界では充分最強クラスよ。貴方に勝てるのはほとんどいないわ》

「それでもいるんだろう？ ……………例えば、お前とかな」



レイの言葉にイデアは少し驚いたような雰囲気を作った。だが、すぐに気を取り直して念話を放った。

《……へえ、私の実力が分かるほどになったんだ》

「まあな。……お前はその姿で今一分かりづらいが……おそらく、俺では遥かに及ばないだろう？」

《まあね。貴方程度では私には適わないわ》

レイはイデアの言葉に少し悔しそうな表情になった。だがレイも悟っていた。その言葉が真実だという事に。

実際、イデアはレイ程の実力者を“程度”と言えるぐらい強い。なぜなら、イデアはレイよりも遥か昔から存在していた。故に絶対ではないがその年月の差が彼等の力の差ともいえる。

《それで？ 貴方はどうしたいの？》

その言葉に一瞬レイは口を開いたが、一つ首を振って己の考えを言った。

「……お前に弟子入りでもしようかと。そうすれば、強くなれそう  
だ」

《何の為に？》

予め、レイの言葉を予測していたのだろう。イデアはレイが言い切るとほぼ同時に口を開いていた。

だが、レイもまたその言葉を予測していたのか、対して悩みもせずと言った。

「己の為に、だ。……こんな不甲斐ない俺では俺が守りたいものを守れそうにないからな」

《……誰を守りたいの？》

「家族だ。詳しく言うなら、お前と村の連中だな。彼らが独り立ちするまではせめて守ってやりたい」

レイの答えが意外だったのか、イデアは口を閉ざし、直ぐに笑い出した。……姿が龍なので笑い声を上げるのではなく、念話でレイだけに聞こえるようにだが。

《あはははははっ！ まさか私までとは、ちょっと予想外だったわ》

「昔言っただろう？ お前の事も家族だと思っていると。俺にとって世界より家族の方が大切だからな」

《それは問題発言にならない？ まあ、貴方が良いならそれで良い

けどね》

暫く話していると笑いが収まったらしい。レイの言葉に返事を返す時には平常通りになっていた。

「それで返事は？」

《構わないけど、その前にする事があるわ》

「……………何の事だ？」

アイデアの返し方が意外だったのが、レイの言葉には少しばかり驚きの感情が表れていた。

《まあ、そう固くならなくても良いわよ。……………単刀直入に言っわ……………》

そこでアイデアは言葉を句切った。その後が発せられる言葉に僅かながら緊張していたレイだが、次の言葉に呆然とする事になる。

《私の主になってくれない》

「……………は？」

レイはアイデアの言葉が彼の予想外の事だったので、かなりの間が空いた後に呆けた声を出した。

そんなレイの様子を見て、アイデアは苦笑のようなものをした。

《意外だった？ でも、私は貴方がその事を言い出した時に、私もまたこの事を言うつもりだったのよ？》

「……何故、弟子入りする者を主にするんだ？ 確かに可笑しいだろう？」

笑いながら、レイは問うた。確かに彼の言う通り、アイデアの言っている事は矛盾している。だが、彼女はレイが言った事に頷きながら言葉を発した。

《まあ、そうかもしれないわね。でもね、これは決まっている事よ。何時かは貴方が私の主に成らなければならぬわ。それが今ってだけよ。あ、理由については聞かないでね。何時かは知る事になるだろうけど、それは今じゃないわ》

「……………分かった。お前の主に成れば良いんだな」

おそらく聞いても答えてくれないであろう事を悟ったレイは、多くを言わずに簡潔に言った。

《ええ、そうよ》

「……で、具体的には何をすればいい？」

《……まず初めに私の真名を知って貰うわ。その後に契約をしまし  
よう》

そう言っ、アイデアは今までいたレイの頭上から飛び去り、彼の  
足下に降り立った。

《……じゃあ、言うわね》

「……………ああ」

頷いたレイに軽く目を細めたアイデアは己の真名を告げた。

《……………。それが私の真名よ。でも、気軽に呼ばないでね。私の  
事は今まで通りアイデアで良いわ。それと私の真名を他人に教える事  
は禁止、もしこれを破ったら相応の罰は覚悟しておいてね》

アイデアの言った事にレイは頷いた。

《じゃあ、次は契約ね。私が魔法陣を展開するから、あなたはそこ  
で居てね》

それだけ言うと、アイデアはレイの反応を特に気にせずに魔法陣を展開しようとする。そんな彼女に溜息を吐きながらも彼はその場を動かずに黙ったまま、彼女に言い分に従った。

暫くして魔法陣が展開された。展開されたそれを満足そうに見て、レイに視線を戻した。

《それじゃあ、次は体液の交換ね。どうする？ 血にする？ それともキスでも？》

「……………お好きな方をどうぞ」

アイデアの言葉に呆れつつもレイはそう口にした。本当に疲れたように肩を落としている。…………まあ、分からなくもないが。

《じゃあ、キスで。簡単だし、そっちの方が私としても嬉しいしね》

「はあ？」

アイデアの言葉に疑問を持ったレイが声を上げたが彼女は気にせず、飛びかかるようにレイとキスした。すると……

「おわ！？」

情けない言葉を発したレイの眼前ではアイデアが急に人型になった。その事に驚いて、レイは一瞬体を離しそうになったが、透かさずアイデアが抱きしめ、今度はキスどころか、ディープキスと言っても差し支えないほど長く口を付けていた。

暫くして調子に乗ったのか、アイデアは舌を入れた。これで完璧なディープキスである。舌を入れられたレイは、アイデアから離れようとすると、上手く力を受け流されて彼女の腕から逃げ出す事は出来ない。アイデアが使っているのは中国拳法の聴勁ちやうけいと呼ばれる技法だ。がはつきり言つて、技術の使用方法が間違っている。

その後、数十分ほどしてからアイデアがレイを解放した。解放されたレイはと言うと、彼の顔は羞恥に染まっている。当然である。彼は恋愛も分らない、初な少年。いや、年齢を考えればそろそろ恋愛に関して理解があっても良いのだが、彼は真剣に理解が出来ていない。……………まあ、頑張れ少年。

暫くして落ち着いたレイはアイデアに口論しようと口を開いた。

「…………ディープキスまでする必要があつたのか？」

「んゝ、別にないわね。始め、貴方に口付した時に契約は完了していたしね」

「おい」

「まあ、良いじゃない。減るものじゃないしね」

「色々減るわ！」

抗議しようとして口を開いたレイの言葉など聞こえないとでもいうように、アイデアは己の状態を確かめた。

「うん、良好ね。少しだけ、昔の調子が戻ったわ。この姿にも成れたしね」

アイデアは己の状態に納得がいったのか、特に意味もなく頷くながらそう口にした。だが、レイはアイデアの言った言葉に引っかかりを覚えた。

「“この姿にも成れた”？ …… お前は元々人型にも成れただろう？」

「ん？ …………… あゝ、そう言えば貴方は知らなかったわね」

「……………？」

首を傾げたレイにアイデアはこういった。

「私は元々、神龍に成れる人なのよ」

「……………は？」

「だから、私は元々は人って事。龍から人に成れるんじゃないで、人から龍に成れるのよ。あ、理由は聞かないでね？」



「……………」

アイデアの言葉にレイは頭を抱えるように手を当てた。だが、暫くして溜息を漏らした。

「……………まあ、いい。今まで俺が勝手に勘違いしていただけだしな。……………で、契約の方は上手くいったんだな」

レイは今一度確認するために言った。それにアイデアは頷いて見せた。

「ええ、問題ないわ」

「なら、宜しく頼む、アイデア」

こうして、レイはアイデアに修行をつけてもらう事に、彼が何処まで上り詰めるのか、それは彼のみが知る事である。

## 第玖話（後書き）

え、アイデアの真名についてはまだ決まっております。なのでアイデアの真名はかなり後に決まると思いますので、もしこのような名前が良い、と言った方がいらっしゃいましたら、感想でもメッセージでも構わないので、お教え下さいますよう、よろしくお願いします。……といっても、それをアイデアの真名にするかどうかは分かりませんが。その事は予めご了承下さい。

……いや、誰からも来ない可能性の方が高いか？ 最後の言葉、意味無いのか？

## 第拾話（前書き）

二週間程、空いてしまい申し訳ございません。いい訳で言うなら、中間試験などで忙しかったんです。……すみません。

## 第拾話

「さてと」

本日の数時間後にアリカ姫が処刑される。そんな時にレイは手に二振りの剣を持ち、とある場所に向かっていた。………言わずとも分かるだろうが、ケルベラス溪谷である。

「踊るか」

当然のように溪谷に進入していく、レイに立ちふさがるのは魔獣。アロンドライトそれを右手に持つ無毀なる湖光で切り払う。自前の身体的な能力だけなので多少苦戦はするものの簡単に斬り去っていく。

しかし、敵も数に任せて襲い掛かる。ガフティーンその事を見ながら、あくまでも自然に彼はもう一振りの剣 転輪する勝利の剣を振るつた。それだけで、彼の剣先は一体の魔獣を真二つに切り裂いた。そこから更に、再生しないようにか、細切れにする。その際返り血を浴びる事になるが彼は気にしない。

なぜ、彼がこんな事をしているかというと、それは七日ほど前に遡る。

レイは約二年ぶりに紅き翼のメンバーに会いに行っていた。

「よっ、お前等。息災だったか？」

「レイ！？　今まで何処に行ってたんだ！」

「ん？　まあ、色々と会ったんだよ。俺の事よりお前等の方が困った状態に陥っているようだな」

レイの問いかけに、皆、口を閉ざした。暫くしてナギが唐突とも言える言葉を紡いだ。

「なあ、レイ？　正義って何だ？」

「はあ？　何を考え込んでいると思ったらそんな事か。まあいい、答えてやるよ。それでお前が進めるのなら……」

そこでレイは一呼吸入れた。

「俺が思うに、正義は主観によっていくらでも変わらと思う」

「……主観によって変わる？」

ナギの疑問にレイは頷いて答えて見せた。

「そう。……例えば、俺達の行為は俺達からすれば“正義”かもしれないが、コスモエンテレケイア完全なる世界の者達にとって、“悪”と呼ばれる行為だったかもしれない。コスモエンテレケイア逆に完全なる世界にとって、彼等の行為は“正義”で、俺達が“悪”だったかもしれない。つまり、主観によって“悪”が“正義”に、“正義”が“悪”になりうるんだ」

「……………」

レイの持論をナギは黙って聞いていたが、それを聞いて尚、彼の瞳には迷いの色が映っていた。それを目敏く見つけたレイは溜息を漏らした。だが、一つ頭を振って更なる言葉を紡いだ。

「ナギ、一つ言っておく」

レイの言葉にナギは顔を上げた。

「お前は俺達の……アラルブラ紅き翼のリーダーだ！ 迷うな！ お前の正義

を見せる！ ナギ！」

レイはそう言って振り返った。帰るつもりなのだろう。

「……後はお前次第だ、ナギ」

レイは最後にそう言い残し、その場から立ち去った。そんな彼を見送るナギの瞳にはある決意が宿っていた。

これが、七日前、レイとナギ達の話。そう、レイがやっているのは数時間後のための準備。出来る限り、魔獣を殺してナギの負担を減らそうとするものだった。

処刑が始まる頃には七割方殺し尽くしていた。その頃にはもうレイを率先して殺そうとする魔獣はいなくなっていた。

そんな時、一人の男がレイの近くに来了。

「レイ。やっぱり、此処にいたのか」

「ん？ ナギか。よく気付いたな」

「まあ、な」

「まあ、準備も方は大体出来た。と言っても、七割方殺しただけでこの有様だが」

レイは一定の距離を保ったまま、こちらの動きを見ている魔獣達を示唆した。

「まあ、俺がいなくなったら襲ってくるだろうから、処刑が始まるまでは俺の近くでいた方が良さぞ。……いや、もう始まっているか」

そうしてレイが頭上を見上げた時、丁度アリカが降ってきた。

「行け！ ナギ！ お前の手で助けてやれ！」

「！？ ……ああ！」

ナギは頷いてアリカ姫の落下地点まで走った。そのため、レイを牽制していた魔獣の何匹かが動き出したが、彼もまた動き、更に殺



していた。咆哮を上げながら死んでいく仲間を見て、魔獣達は再び距離を取った。

「ナギ！ 後は頑張れよ！ お前の力で駆け抜けてみせろ！」

丁度、アリカ姫を腕に納めたナギに向かって一言投げかけ、レイはアリカと入れ違いのように地上に上がっていた。

アリカの処刑が始まる少し前まで時間が遡る。

「これより、戦犯アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの公開処刑を行う！！」

地上では元老院議員の一人が罪状を読み上げている。

「魔獣蠢くケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとって、正に『死の谷』」

更にこれから行われる処刑法を説明する。内容はこの処刑法が如何に残虐なのかを語り、目的は死刑囚に恐怖を与えることのようなのだ。……と言ってもこのような処刑法を行われる重罪人は狂うなり壊れるなりしているので一々説明するのは無駄だと思っただが。そして、その説明も終わり、遂に処刑の時刻がやってきた。

「歩け」

「触れるな、下郎。言われずとも、歩く」

アリカ姫は一步一步と自らの足で死に向かって着実に歩いていく。そして、最後の一步という所で、目元にうつすらと涙を浮かべ、

「さらばじゃ、ナギ……」

最愛の人の名前を口にし、足を踏み出し重力に身をゆだねる。直後、谷底から響く魔中の咆哮が辺り一帯を支配し、処刑の完了を知らしめる。

「よろし……」

「よぉーっし、こんなモンだろ」

何らかの指示を出そうとしていた、元老院議員の台詞に一人の兵士の格好をした人物の声が重なる。

「録れたか？　ちゃんと録れたか？　よぉーし、ご苦労ッ　お  
ゝい、おっさん。これ生中継とかねえよな？」

「無礼者！　何者だ、貴様。名を……」

「おっさん」

再び言葉を遮り、兵士は元老院議員の頭を鷲掴みにした。

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは『なかった』ことになる。わかるな？」

最後の一言を強調し、認めないならば実力行使も辞さないといった不遜な態度。元老院議員に対しこのような態度を取る者。尚且つこのタイミングで現れる者。

頭を掴まれた議員は一人の男の姿が脳裏をよぎった。

「きつ、貴様は」

「ぬんっ」

かけ声と共に兵士の鎧が弾き飛んだ。

「千の刃の……ジジャ……ジャック・ラカン　　ッ!?!」

議員の予感ハ的中していた。それも最悪な形で。違う所に視線を向けて見れば、

「青山……詠春ッ!」

「アルビレオ・イマ!」

「ガ……ガトウ!」

ジャックに続き、詠春、アルビレオ、ガトウ、と大戦の英雄が集結していた。

「馬鹿なっ。いかな千の呪紋サウザントマスターの男とはいえあの谷底から生きては…  
…」

「それはどうかな?」

再三にわたり、この議員の台詞はまたしてもラカンに阻まれることとなった。……………同情するよ、議員。  
ジャックは不敵に笑いながら、言った。

「俺等の面子で足りないのがいるだろ？ 恐らく、あいつもナギと一緒に谷底にいるからな。二人の安全は保証されてんだよ」

「『魔神』か！ しかし、同じ事だ。どれほどの天才であろうとも魔法が使えなければ……………」

「ハッ。それがどうした？ 魔法が使えない？ そんなものアイツにとつては些細な問題だ」

……………四回目。どうやらこの議員は最後まで台詞を言えない星の元にでも生まれてきてしまったようだ。……………更なる同情を、議員。

「なぜなら、レイは 『天災』 だからな」

「ジャック、何を酷いこと言ってるんだ？ 殺されたいのか？」

「て、おい！ そこで出てくるなよ！」

「いやいやいや、下のことは粗方終わったから此方の加勢に来たんだよ」

「ん？ レイ、その服……………」

指摘されたレイは笑いながら、肩を竦ませた。不可抗力だ、とでも言うように。因みにレイの服は魔獣の返り血で紅に染まっていて、紅以外の色を探そうとしても見つからない程、返り血を浴びていた。

「まあ、そんな事より……………俺も此方に参戦させて貰うよ、議員殿？　まあ、その程度の戦力では直ぐに終わるだろうけど…………」

「フフ…………その程度の戦力だと？　愚か者が。このイベントの警備は此処に見えるだけではない。周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでもこれを…………」

「だから、その程度の戦力で、いいのかって聞いてんだよ」

紅き翼の面々はそれぞれ氣や魔力を溜めている。そこで、レイが号令を上げた。

「殺<sup>や</sup>るぞ！」

『おう！／ええ！』

その後、レイ達が数分暴れただけで、全滅させてしまった。元老院議員を除く全ての者が瀕死状態になっている。

暇を持て余した、レイ達は丁度溪谷から出てきたナギ達の話进行と、レイ特製の認識阻害魔法で、堂々と数メートルだけ離れた

場所から見守っていた。……因みにこの時点でレイは服を着替えた。流石にずっと血まみれの服では嫌だったのだろう。

少し口論した後、素直になったアリカ姫がナギのことが好きだと白状し、ナギはそれを受け入れ、キスをした。因みに、レイ達は数メートル離れた正面から見えています。数名は笑いを堪えている状態になっている。まあ、別に笑おうが気付かれはしないだろうが。

そして、その後もナギ達は少しだけ話し合い、ナギが殴り飛ばされた後、

「なあ……アリカ」

「うむ……？」

ナギはアリカ姫に呼びかけ、少しだけ間をおいて重大なことを発表した。

「結婚すつか」

笑顔で言い切ったナギに対し、アリカ姫は呆然としている。

「……アンタの罪も後悔も……まだ残る民への責任ってヤツも……全部一緒に背負ってやるぜ」

ナギの言葉に未だに呆然と目を見開いている。……一方、レイ達

はとあるタイミングを計っていた。……………笑いを堪えながら。

「なっ」

「む…………」

ナギの笑顔と言葉にアリカ姫は表情を赤くしたが、暫くして、

「はいっ」

満面の笑みでナギに答えた。そして、

『おめでとー！』

「おわ！？」

「む…………！？」

急に正面から聞こえたレイ達の讃辞にナギ達は驚いた。

「いやゝ、やっつくつついたな。これは宴会だな」

「フッフ、それも良さそうですね」



「がつはっは！ 遂に決めたか、ナギ！」

「良かったな、ナギ」

「よく決断したな、ナギ」

ナギ達が反応しないのを良いことに彼等は口々の賛辞を送った。  
そして、やっと驚愕の淵から帰ってきたナギは呟いた。

「おっ……お前等何時から……」

『最初から』

「正確に言えば、お前等が溪谷から飛び上がってきた直後か」

レイがそう言うと、ナギは怒りを顕わにした。

「て、テメエ等……！」

「なあ、詠春。新婚旅行は京都で良くないか？」

「ああ、それが良いだろう。ナギも元から行くつもりだったらしい  
しな」

ナギの怒りを適当に受け流し、レイ達は黙々とナギ達の新婚旅行先を決めている。……………本人達の意思関係なく。とはいえ、ナギも起こりながらも嬉しそうにしていたが。

## 第拾巻話（前書き）

1 1 / 2 最後をちょっと弄りました。

## 第拾巻話

アリカを救助した後、まず彼等はアリカに聞き、アスナを助けに行った。そして、その足で、ナギ達にとって新婚旅行でもある、京都へと向かった。……序でに、アイデアについてはレイが呼びに行き、同行している。処刑の時は島で待機していた。

「京都か。懐かしいな」

「ん？ レイは来たことがあるのか？」

「昔に、な。さてと、詠春。案内宜しく頼む」

レイの言葉にその場にいた他のメンバーからも同意の声が上がり、詠春は苦笑しながら、京都の名所を案内した。……騒がしいので、レイが認識障害の魔法を使用した。

その中でも、清水寺に行った時はちょっとした騒動になりかけた。

「お？ これが、噂の高台か。……よし、飛び降り……」

「止めい！ 他のお客様に迷惑になるだろうが！」

「気にするな。それにほら……」

「ん？」

レイが示唆した場所では馬鹿……即ち、ラカンが飛び降りようと試みていた。本来なら、ナギも率先してやっていそうだが、今回はアリカがいるということで止めたそうだ。……と言うより、二人の雰囲気は正直、周りにいる人が鬱陶しく感じる程、隔離された空間になっている。……ラブラブなのは良いんだが、もう少し人目を憚ってほしいものだ。

詠春はラカンの状況を判断した瞬間、叫んでいた。

「おい！ ジャック！ 止める！」

「別に死にゃあ、しねえよ」

「そういう問題ではない！ その行為が他のお客様に迷惑が掛かるというんだ！」

そんな詠春とラカンの様子を遠目に見ている一同は苦笑しながらその光景を見守っていた。その中には先ほど、飛び降りようとしていたレイも含まれている。……どうやら先ほどの行動は演技だったようだ。

そんなレイに近づく者がいた。

「レイ……」

「ん？ ……アスナか。どうした？」

「お腹空いた。……後、タカミチつまらない」

「ええっ!？」

アスナの発言に少し離れた場所に立っていたタカミチは絶望したかのような表情を浮かべる。……頑張れ少年!

レイはアスナの言葉を聞いて、現在の時間を確認した。見てみるとまだ午後の五時前後だった。

「アスナ、もうちょっと待ってくれるか? 今、間食すると夕食が満足に食べられないだろうからな」

レイはそう言いながらアスナの頭に手を乗せて撫で回した。その行為をアスナは目を細めながら黙って受け入れた。そんな彼女の様子を見てレイの口元に笑みが浮かんだ。

そんな二人の様子を見て、イデアがぼそりと呟いた。

「……ロリコン……」

「……………」

呟く程度だったその言葉は、レイの耳に届いてしまった。レイは無言のまま立ち上がり、イデアの方に向き直った。

「アイデア。それは幾らなんでも酷くないか？　俺はアスナの頭を撫でただけだぞ？」

「冗談よ、冗談。……でも、その手を離さないと流石に疑うわよ？」

アイデアが指摘したのは、今尚アスナの頭に乗せている手だった。レイは今気付いたかのように驚愕の表情を見せた後、素早く手を離れた。……アスナは残念そうにしていたが。

レイはその手で自身の後頭部を掻いた。

「あゝ、忘れていたんだよ」

「まっ、良いけどね。貴方がどんな性癖であろうが……」

アイデアの言葉にレイは溜息を吐いた。表情も少し疲弊したかのように見られる。

「……アイデア。俺にそんな性癖はない……」

「そう？　なら良かったわ」

クスクスと、アイデアは口元に手を当てながら笑っている。それを見てレイはからかわれたと悟り、再度嘆息する事となった。

彼等は清水寺から出た後、もう少しだけ京都を見て回り、詠春の実家に来ていた。そして彼等は、宴会を開くことにした。……新婚旅行はどうなった？

「アスナは飲んじゃ駄目だぞ？」

「……うん……」

見た目が少女のアスナにレイは注意をして自身は飲み出した。……レイも見た目はまだ十二歳程度だが。

「タカミチ君は真似しちゃ駄目よ？」

「分かりました、アイデアさん」



アイデアもタカミチの注意をしつつも飲んでる。今、酒を飲んでいないのはアスナとタカミチだけである。……一応、ナギも未成年なのだが気にせず飲んでいた。この場に常識人はいないのだろうか？そして、夜も更け、そろそろ宴会も終わりだと思っていた時に、彼等の元に凶報（？）が届く。それは、飛驒の大鬼神・リヨウメンスクナノカミの封印が解かれたとの事だった。タカミチ、ガトウを除いた紅き翼は酔いも覚めぬまま、リヨウメンスクナノカミの再封印に向かった。

「それで？ 誰が行く？」

紅き翼の中でも素面なレイが仲間になさそうに問いかけた。自身は行く気がなさそうに見える。

「俺が行くぜ！」

「俺様も行くぜ！」

見事なぐらいに酔いが回っているナギとラカンが答えて、リヨウメンスクナノカミに向かって行った。……ご愁傷様です、飛驒の大鬼神。

「ふむ？ これでは私の出番はなさそうですね。大人しく見学することにしなう」

レイと同じように素面のアルビレオは口元に笑みを浮かべている。

「あゝ、俺は、封印の、準備を、しておく」

飲んだ後に急に動いたのが悪かったのか、詠春は途切れ途切れ言葉をついだ。

その後、リヨウメンスクナノカミはある意味暴走しているナギとラカンにフルボッコにされ、封印された。これをもって本日は解散となった。

次の日、二日酔いでナギ、アリカ、ガトウ、詠春がダウン。アリののみが比較的軽度なものだった。……新婚旅行ではなかったのか、お二人さん。

まともに動けるのは酒を飲まなかったアスナとタカミチ、酒を飲んでも二日酔いにならなかったレイ、イデア、ラカン、アルビレオぐ

らいだった。

早朝の日が昇る頃、レイとタカミチは偶然屋敷で出くわし、縁側で雑談をしている。

「全く。酒は飲んでも飲まれるなという格言を知らないのか、彼奴らは」

「……僕としては何故あれほど飲んでいたレイさんが、二日酔いになっていないのかが疑問なんです……」

レイは酒をナギの倍以上の量を飲んだのだが、一切酔わなかった上、二日酔いもない。タカミチにはそこが謎なのだろう。

「俺は今まで酒で酔ったことはない。それにナギ達は弱すぎるんだ」

それにしても暇だなあ、と最後に呟いてレイは口を閉ざした。そのまま、暫くその場には沈黙が舞い降りた。しかし、それを打ち破る者が現れた。

「レイ！ それにタカミチも」

彼等がいた縁側にアイデアが寄ってきた。

「ん？ イデアか。おはよう」

「おはようございます、イデアさん」

それに気づき、挨拶を交わす二人。

「二人とも、今日は暇？」

「ん、今日は恐らく暇だろうな」

「師匠もナギさん達も二日酔いでダウンしていて、今日の予定は明日に回されそうですから、今日は暇ですね」

二人の言葉を聞いて、上機嫌にイデアはこんな事を言い出した。

「じゃあ、今日は朝食後に京都巡りに行かない？ アスナちゃんも誘って」

「別にいいぞ」

「僕も大丈夫ですよ」

特に考え込む事もなく二人は了承した。まあ、二人は暇だったの  
でこの誘いを受けるのは当然とも言える。イデアがその事を分かっ  
ているのか、いないのかは分からない。狙って言っているのかもし

れない。その事はアイデア以外には分からない。

「じゃあ、朝食後、玄関に集合ね」

「ん」

「分かりました」

レイ達が頷くのを満足そうに見て、アイデアは去っていった。残った二人も京都巡りの準備のため、それぞれ割り当てられている部屋に戻る事にした。

そして朝食後、彼等は京都の町に繰り出した。アスナに関してはアイデアが言っていたように誘ってきていた。先日回れなかった場所も見えて回ったり、先日回ったとしてもゆっくり見て回れなかった場所に行ったり、様々な場所を見て回ったりしていた。

午前中は様々な場所に人力車に乗ったりして見学をし、午後からは東映太秦映画村に費やした。

京都巡りをしている時、時々だがアスナが笑顔を浮かべたりしているのを見て、レイやアイデアは連れ出したことは正解だったと内心思っていた。そんな彼等の様子を見て、周りからは仲の良い家族のように見えるのか、微笑ましそうに見守っている人達を発見して、タカミチが若干顔を赤くしていたとか。

レイ達は京都巡りから夕刻に帰ってきたが、その時に復帰していたのはアリカ、ガトウ、詠春の三人だけだった。ナギのみが翌日まで引きずることになった。

夕食前に京都巡りでかいた汗を流すために風呂に行くことになった

たのだが、イデアが一緒に入る、つまり混浴を勧め、アスナも同意したが、レイは難色を示し、タカミチは顔を真っ赤にして猛反対。しかし、イデアとアスナが乙女の秘密兵器 涙を見せ（イデアは噓泣き）、レイは嘆息し、タカミチは涙に焦り同意してしまった。その後、イデアが着替えを持って風呂場に集合する事を約束させ、一度それぞれ自室に戻ることに。そして風呂にはレイは目隠しをしながら入ることにしたが、タカミチは流石にその様な離れ業は出来ず、しかもイデアに弄られて顔を真っ赤にしながら入浴することになった。……合唱。

翌日、漸く復帰したナギと共に紅き翼＋ は京都の隠れ家に行くこととなった。そこで、集合写真を撮って、旧紅き翼の写真の隣に飾ることになったのだが……

「いや、不味いだろう。俺達だけならともかく、アリカさんとアスナが写っているんだから……」

それもそうだ、とナギ達は今更ながら納得し、その写真はその場にいる人数分に複製して全員が持つことになった。

そして、レイとイデアは詠春にお礼を言って別れる事にした。レイはアスナが悲しそうにしているのを見て、偶に会いに行くという約束をする事に。そして今度こそ彼等は、島へと帰っていった。

こうして、舞台は一時の閉幕を迎える。

レイは紅き翼と別れ、家族を護るために更なる力を欲し、修練に明け暮れるだろう。

一方で、騎士<sup>ナギ</sup>と救われた姫は子を産む。英雄の息子は何時しか物<sup>原</sup>語を紡ぐだろう。

その物語は異端者<sup>レイ</sup>の存在によって何か変わるのだろうか。

唯一分かっている事は何時か英雄の息子と異端者<sup>レイ</sup>の道が交わる事だけだった。





## 第拾壱話（後書き）

これは第一章最終話という意味で、物語はまだまだ続きます。

## オリキャラ設定 part 2

名前	レイ <sup>アタナシア</sup> II AII デュミナス
年齢	30歳（精神年齢は不明）
身長	190? 越え
体重	不明
性別	男
属性	中立・中庸
渾名	『魔神』『剣聖』『天災』『無限の武器庫』『死の選定者』『帝国の守護神』など

### 考察

#### 容姿

麻帆等に来るに当たり、肉体年齢は三十歳にした。しかし、外見年齢は二十歳そこそこである。これは二十歳の時から、どう頑張っても年齢を変えても変わらなかったためだ。なお、原作については時間が経ちすぎているのもうほとんど覚えていない。

顔は美形で格好良く、なおかつ、可愛さが同居しているような感じ。微笑みを浮かべると格好良さと可愛さの比は4:6。普段は9:1であるのであまり可愛さは目立たない。周囲の同姓から嫉妬の念が上がる事間違いない。（本人は自身の容姿に疎く、何故その様な事

になるのか分かっていない。だが、天然という訳ではない)

蒼髪虹眼。髪は肩より少し長い程度まで伸ばしている。偶に他人に髪をいじられることがある。

趣味

修行や書物集めたり、料理をしたりすること。他には歌や楽器を演奏したりすることなどが挙げられる(本人は気づいていないが歌と楽器の演奏がかなりうまい。しかも“言霊”の能力を得たことによつて歌は無意識の内に他者を魅了するほどのものになっている)。

性格

基本、身内や親友に優しく、他人には厳しい。本人曰く、「家族さえ守ればそれで良い」。よつて、家族に徒なす者が有れば制裁が降る。ただ、家族に対して過保護すぎる面があるので、呆れられることも。目上の人や尊敬できる人には敬語を使う事がある。

## ステータス

筋力	S ++	魔力	E X
耐久	A +++	幸運	E X
敏捷	S +++	宝具	?

## 能力

透化：A +

黄金律：E X

千里眼：A＋

カリスマ：EX

精霊の加護：EX

言霊：A

創造：A＋

時間・空間：EX

直死の魔眼：EX

e t c

名前      アイデア

年齢      不明

身長      180? 越え

体重      秘密

性別 女

属性 中立・善

## ステータス

筋力 E X 魔力 E X

耐久 E X 幸運 E X

敏捷 E X 宝具 ?

## 考察

シンのペットだったらしい小型の神龍。レイと契約した後はほぼ人型で過ごしていた。龍型でいたのには理由があったそうだが、本人の回答拒否でレイは知らない。

主の成長に合わせてアイデアも強くなっている。広域殲滅戦闘では龍型になって、暴れ回る。未だにレイでは勝てない、使い魔である。

容姿

絶世の美女。男であろうが女であろうが振り返らずにはいられない容姿。

金髪蒼眼。髪は腰辺りまで伸ばしている。

趣味

読書・歌・楽器の演奏・料理 e t c

性格

レイが認めた者には親しく接するが、それ以外は眼中にすらない。



## 第拾弐話（前書き）

第二章突入。

久しぶりに書いたのでグダグダ。

11・11 内容多少変更。

## 第拾弐話

麻帆良学園。

この学園はこの世界では日本、いや世界一と言っても過言ではない規模の学園である。

その学園の学園長室に今、三つの影があつた。

一人目はこの学園の学園長である、近衛近右衛門。通称、ぬらりひょん。

二人目はかつて、かつて魔法世界での大戦期に紅き翼の一員として活躍し、現在は悠久の風に所属し、麻帆良学園で教師として赴任している、タカミチ・T・高畑。

そして最後は、同じくかつて魔法世界での大戦期に紅き翼の一員として活躍し、今尚英雄として称えられている、『魔神』レイ・A・デュミナス。

レイはある理由から、この学園に来る事となつた。

その理由である一通の手紙を取り出しながら、レイは深く嘆息した。

彼は此処までの経緯を思い返した。



それは、久しぶりにレイが、帝国に顔を出しに行ったときのことだった。

「久しぶりな、テオ」

「うむ。そうじゃな、レイ」

「それで、どのような用件で呼びだしたんだ？」

「うむ。タカミチからお主に一通の手紙が届いての」

テオドラはレイの言葉に頷き、一枚の手紙を差し出した。その手紙自体は何の変哲もないただの手紙なのだが……

（果てしなく面倒な予感がするんだが……）

レイはそう思い、テオドラに見えないように嘆息して、手紙を受

け取った。次いで中身を取り出し、それに記されている事に目を通して再び嘆息した。

そんなレイを見て不思議そうにテオドラは聞いてきた。

「どのような内容だったのじゃ？」

「あゝ、麻帆良に教師として赴任しろとき。面倒だな」

「なるほどの」

テオドラはお付きの人が出してくれていた、カップを手にとって笑っている。

「テオは関係ないからってその反応は酷くないか？」

「すまん、すまん」

「それに、俺が行くと言う事は帝国最強の守護者を連合にくれてやるようなものだが、良いのか？」

言われて気付いたのか、眼をパチクリと瞬きをして、一つ頷いた。

「確かにそれは困るの。お主がいなくなると厄介事が増えてかなわん」

「……まあ、一度行ってから考えるか。暫く休業させてもらっぞ」

「むう、仕方がないのう」

テオドラが言った時には、本当に仕方がない、と言った雰囲気を宿していた。

そんな、テオドラをからかうようにレイが一つ声を上げた。

「……というか、お前がジャックに、妾の騎士になつてほしい、って言ったらそれで良いだろ？ お前、ジャックの事好きなんだし」

「／／／／／　そう簡単にいく問題ではない！？／／／／／　……  
それにあ奴は妾の事を子供扱いしかしてくれん……」

テオドラは自分で言って、余計に自覚してしまったのだらう。顔を俯かせて本当に悲しそうに顔を歪ませている。

レイはそんなテオドラに歩み寄り、頭を撫でた。

「確かにそうかもしれないが、今まで直接気持ちをぶつけた事はないだらう？」

「……………つむ……………」

「ならば今度会った時に、お前の気持ちを言葉にしてみると良い。じゃあな」

「あ！　おい！」

テオドラが引き留めようとするも、レイは全く振り向かずに光を媒体にした転移魔法でその場を去った。

その場に残されたテオドラは暫くして苦笑した。

「まったく。……あ奴は変わらんのう……」

「……ぬらりひょん……この手紙に書いてある通りに、麻帆良で教師として働けと？」

「いや、前も言ったけど、わしはちゃんとした人類だからね？　生粋の日本人だからね？」

近右衛門が言う前とは、以前レイがとある理由からこの学園に来た時のことである。どのような理由で以前にこの学園に来たのかは後

ほど明かされるであらう。

「そこはどうでも良いだろう、ぬらりひょん。……もう一度聞くが、俺に教師として働けと？」

「どうでもいいって……まあ、いいわい。タカミチ君の手紙で大体の事情は知っているとと思うが、お主の親友の息子であるネギ君が一月後にこの学園で教師になる事になったんじゃないよ。それで、その補佐を頼みたいんじゃない」

「断る」

「ほ！？」

あまりにも、あんまりな即答に近右衛門は思わず声を上げた。その様子を見ながら、レイは嘆息した。

「面倒だし、ナギの息子を補佐する義理もない」

「何故じゃ？ お主の親友の息子じゃぞ。それでも義理がないといえるのかのう？」

「無いな。よく言うだろう？ 子は親を選べない。逆もそうだ。親は子を選べない。“偶然”ナギの息子として生まれてきた子供を俺が補佐する義理はない」

実に面倒くさそうにレイは正論という名の逆説を唱えた。確かに事実だがそこまで割り切れる人間はこの世に数人といまい。レイはその数少ない例外だった。

「じゃが……」

「……分かった。条件付きならば、補佐をしてやる」

「ふむ。その条件を聞こうかの……」

レイが提示した条件は下記参照。

- 1 担当教科は歴史。やり方は俺の自由。文句は言わせない。
- 2 ナギの息子が来たら、表の補佐だけはするが、裏の補佐はしない。序でに俺の事を話すのも禁止。
- 3 定期的に休みをもらいたいので、基本教師以外の仕事はしない。
- 4 教師以外の仕事は別料金。此方も善意でする訳ではない。裏の仕事は一切しない。

「こんな所か」

「むう。裏の仕事はしてくれんのか？」

「ああ。あくまでも俺は教師としてここに来た。……それに裏の仕事の依頼料は払えないだろうしな」

「……いくらじゃ……」

「最低　　だな」

「……………贅沢じゃのう」

近右衛門は提示された金額に唸った。だが、レイは何を言っている、とても言う風に嘆息しながら手を振った。

「これぐらい当然。それに、俺が下位組織とはいえ、連合の依頼を受ける事自体あり得ない事だ。タカミチへの義理とあの借りが無ければ、来るつもりすらなかった」

「はははっ。貴方は変わりませんね」

「当たり前だろ、タカミチ。良くも悪くも人は変わらない」

レイは笑みを浮かべている。近右衛門がレイに向き合って、最終決定を示した。

「では、お主には中等部の歴史の教師。そして、タカミチ君のクラスの副担任になってもらうぞ」

「ああ、了解した。では、俺は往くぞ」

言って、踵を返したが、ふとある事に気付いて振り返った。

「そういえば、あいつは元気にやってるか？ 不自由なく過ごしているか？」

「彼女なら元気にやつとるよ。契約の懸賞金取り消しまで、後1年と少しじゃの」

「そうか。……アイツに何かあったら、この学園を消してる所だ」  
「……………物騒な事を言わんでくれんかのう……………」

近右衛門の眩きを黙殺をもって返し、レイは再び踵を返して背後に手を振った。

「そうそう。契約を破った場合、俺は直ぐに帰るからな」

最後に、そう言い残して、レイは学園長室から立ち去った。立ち去ったのを確認して、近右衛門は深く息をついた。それを横目にタカミチは苦笑した。

「学園長でも、レイさんを相手にするのは辛そうですね」

「そうじゃのう。十数年前にあった時とは比べ物にならないくらい変わっておった。何があったんじやろうな」



「僕にも分かりませんが、……一つだけ確かなのは、あの人は家族を護るためだけに強くなる事を望んだのですから、家族については敏感なんでしょう」

「……確かにのう。学園を消すと言っていたのは確実に本気のようにやったしのう」

近右衛門は言いながら、遠い目をし、タカミチは乾いた笑みを浮かべていた。その後も、彼等はレイについての雑談に花を咲かせていた。

こうして、舞台は再び幕を開けた。

英雄の息子が紡ぐ物語原作よりも先に到着した、異端者レイはそれまで何を為すのだろうか。

それは誰にも分からない。

唯一言える事は英雄の息子が紡ぐ物語原作が確実に変わるであろう事だけだろう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3956n/>

---

世界の異端者

2011年5月11日06時30分発行